

第七章

〔神功皇后〕説の検討

帶^{タラシヒメ}姫

神の命^{ミコト}の 魚釣^{ナツ}らすと

御立^{ミタ}たしせりし 石^{イシ}を誰^{タレ}見^ミき

〔山上憶良(万葉集869)〕

「神功皇后さまが魚釣りのためにお立ちになった石を誰が見たのだろうか」

乙女^{オトメ}らが

袖布留^{ソデフルヤマ}山の 瑞垣^{ミツガキ}の

久しき時ゆ 思ひきわれは

〔柿本人麻呂(万葉集501)〕

「乙女たちが袖を振るのではないが、布留の石上神宮の瑞垣のように、長年思い続けていました。」

(石上神宮に歌碑が立つ著名歌)「

かくてなほ かはらずまもれ よゝをへて

このみちてらす 住吉の神

〔後鳥羽上皇御製〕

「(神功皇后を助けた住吉大神が祀られている住吉大社に後鳥羽上皇が参詣されたときの御製。住吉大社は神功皇后が感謝して住吉大神三柱を祀り、のちに神功皇后自身も祀られた神社)」

七・一

第十四代 仲哀天皇の悲劇

◎〈神功皇后〉の不思議と干支による紀年推定

この章では、

「卑彌呼」Ⅱ〈神功皇后〉説

——を検討するが、これはとても面白い説である。

なにが面白いかというと、この説を最初に主張したのが『日本書紀』の編纂者そのもの——あるいは少しあとで注釈を加えて人たち——だからである。

つまり千何百年も前からある、じつに古い説なのだ。

以下に『日本書紀』の神功皇后紀（紀は『日本書紀』に書かれていることを示す）の概要を記すが、その内容はじつに興味ぶかいものがある。

一般に皇后についての記述は各天皇紀の一部としてあるだけで、一行か二行ですませている場合が多い。

しかし〈神功皇后〉にかぎっては、皇后だけで大きな一つの章となっており、しかもその長さが皇后のご主人の仲哀天皇紀の三・七倍、また皇后の子どもの應神天皇紀の一・六倍もあり、その長さだけでも異常なのだ。

女性の天皇について多くの事柄を書いてある章は、のちの推古天皇などにも有るが、「皇后のみ」についてこんなにも多くの頁を費やしている例は、他には見られない。

それから、神という文字が諡号の頭についている点も興味ぶかい。

漢風諡号は『記紀』が編纂された直後につけられたと考えられるので、そのころの人々の考え方がその名前によつて分かるのだが、天皇の諡号ですら神がついているのは神武・崇神・應神の三天皇のみなのに、皇后をたたえてこんな名前で尊称しているのだ。

また『魏志倭人伝』の引用を再三おこなっている点も、興味津々である。

そういう神功皇后紀であるが、前後の仲哀天皇紀や應神天皇紀とのつながりについて多くの議論がなされてい

るので、この三つを、『日本書紀』をもとに、おおまかに記してみよう

なお、紀年について注記しておく。

本章では、干支^{カンシ}にもとづく推定紀年を各所に記すが、その一つは「一二〇年加算」で、これは『日本書紀』などの日本の史書に記された紀年を、干支二回り違えてあるとして一二〇年加えたと実際と一致するという考えである。

干支による表現は六〇年で一巡——つまり還暦——するが、これを二巡した一二〇年だけ、実際の紀年と違って古く見せているので、それを補正しようということである。

この方法は、どの時代でも通用するわけではなく、古い時代はもっと違っているだろうし、新しい時代になると『日本書紀』の紀年と実際とが一致してくるので零年加算となる。

しかし〈神功皇后〉から應神天皇にかけての時代では、一二〇年を加算すると近隣国の史料と矛盾しないことが多いので、かなりの信憑性があるようである。

もう一つの推定法は、伝えられている干支からその実

紀年を推定する「干支推定」である。

たとえば、應神天皇の崩御年の干支は甲午^{コウゴ}（きのえうま）で、これは西暦にすると二七四年、三三四年、三九四年、四五四年・・・などだが、各種の史料や考古学的知識などから、もし干支が正しいとすると、西暦三九四年の可能性が高い——と推定するのである。

もちろん「一二〇年加算」も「干支推定」もごくごく大まかな話なので、これらを元に数年単位のごまかな議論をすることは避けねばならない。

第五十四代天皇までの、崩御の実質紀年の推定数字は、付録に記してある。

第十四代 仲哀天皇の物語

国風諡号 タラシナカツヒコノスメラミコト 足仲彦天皇

漢風諡号 チュウアイテンノウ 仲哀天皇

〔在位・西暦一九二〇年～二〇〇年〕+

〔降誕・西暦一〇九年／崩御・西暦二〇〇年〕+*

〔皇宮・穴門豊浦宮^{アナトトユラノミヤ}（山口県突端の関門海峡近く）

カシノミヤ
樞日宮（九州の福岡市）

ナガノノミササギ
〔御陵・長野陵（大阪府南河内郡）〕

十皇紀は西暦に六六〇を加えればよい。

＊崩年干支推定は西暦三六二年

第十四代の仲哀^{チュウアイ}天皇は、その前の成務^{セイム}天皇とともに、
わずかな記述しかない天皇である。むしろ〈神功皇后〉
の夫として知られるといったほうがよい。

第十代 崇神^{スジン}天皇

第十一代 垂仁^{スイニン}天皇

第十二代 景行^{ケイコウ}天皇

——この三代の天皇紀は記述も豊富だし考古学的にも
いろいろと話題がある。

しかし第十三代成務天皇になると、国・県・郡・邑^{ムラ}
どの境界をきちんとししてその長となる者を定めて諸国を
安定させた——という功績が無造作に書かれているとい
どである。

おそらく、前三代によって大和朝廷の権威が確立し、
制度を充実させる時期に入ったからであろう。

成務天皇は景行天皇の皇子で、同じ皇子の日本武尊^{ヤマトタケル}
とは異母兄弟にあたる。

日本武尊は景行天皇より先に薨去^{コウキョ}したので、別の皇子
が即位したのだ。

日本武尊は実質的には天皇だったのではないかと——と
の推理もあり、『風土記』には倭武^{ヤマトタケル}天皇または倭健^{ヤマトタケル}天皇と
して記されてもいる。

つぎの第十四代には、本来なら成務天皇の皇子が即位
するのだろうが、男子がいなかったので、甥にあたる日
本武尊の第二子が即位したとされている。

不運の英雄だった日本武尊の御子の顔を立てたらしい
のだが、これが仲哀天皇である。

母親は第十一代垂仁天皇の姫で兩道入^{フタジノイリビメ}姫命である。

以下編年的に主要な事項を記す。

（以下の各紀年は、上が皇紀を西暦になおした数字であ
り、下がそれに一二〇年加算した数字である）

▽仲哀天皇元年（西暦一九二二年／三一二二年）

〔白鳥も焼けば黒鳥！〕

先代の成務天皇崩御の翌年に即位。

この年の冬、白鳥になって虚空に消えた父の日本武尊
を偲んで、人々に白鳥を献上させたが、北陸道（図4・

1 参照) の人が献上するつもりで持ってきた白鳥を、異母弟にあたる蒲見別王が、^{カミミワケノミコ}「白鳥も焼けば黒鳥だ」と凄じくことをいって奪ったので、怒った仲哀天皇は兵をやつてこの異母弟を誅殺^{チュウサツ}する。

皇位をめぐつて異母兄弟どうしの軋轢^{アツレキ}があつたことをうかがわせるが、『日本書紀』にはこういった皇室の汚点ともなるような事件が、じつに率直に書かれている。

▽仲哀天皇二年（西暦一九三年／三一三年）

〔神功皇后〕の奇跡が始まる〕

正月――

第九代開化^{カイカ}天皇の玄孫^{ヤシヤゴ}にあたる氣長足姫尊^{オキナガタラシヒメ}を娶つて皇后とする。これがすなわち後の〔神功皇后^{ジンクウコウゴウ}〕である。皇后の母親は新羅^{シラギ}の王子の子孫ともいわれている。

なおその前にお妃が産んだ皇子が何人かいて、そのうちの二人が、仲哀天皇の死後に皇后に背いて事件を起こす。

二月――

福井県若狭湾岸の敦賀^{ツルガ}――昔の読みはツヌガで、ここに漂着した朝鮮半島からの帰化人の名からきた地名らしい――に行幸して仮宮を建てて滞在する。

敦賀は日本海を渡つて朝鮮と交通するときの要地だつ

た。

それまでは先代の成務天皇の皇宮のあつた滋賀県大津市に宮をかまえていたのだが、朝鮮半島と連絡しやすい場所に遷ったことになる。

なお成務天皇より前の都はほとんどが《大和》の地である。

三月――

南海道（図4・1参照）を巡幸したとき、九州の熊襲^{クマソン}が背いて朝貢しなかつたので、征伐するために九州方面に居を移すことにし、皇后と穴門^{アナト}で落ち合うことにした。穴門とは山口県の下関市のあたりである。

六月――

皇后が敦賀を出発して船上で食事をしていたとき、鯛がたくさん集まつてきたので、その上にお酒を注ぐと、鯛が酔つて浮かび上がり、漁師が大喜びした。

〔神功皇后〕の奇跡の始まりである。

九月――

落ち合った天皇と皇后は、宮殿を穴門^{アナトノトユラノミヤ}に建てた。これが仲哀天皇の第一の皇宮、穴門豊浦宮である。

▽仲哀天皇八年（西暦一九九年／三一九年）

〔皇后による神託と熊襲征伐の失敗〕

正月――

いよいよ九州北部、いまの福岡県に移動する。

ここで、北九州市の西方の岡^{オカノアガタヌシ}県主の祖の熊^{ワニ}鰐や、伊都^{イト}――すなわち『魏志倭人伝』の伊都^{イト}国――の県主の祖の五十^イ迹^ト手の迎えを受けたりして、難^{ナノアガタ}県――すなわち博多湾岸で『魏志倭人伝』にある奴^ナ国――の檀^{カシヒノミヤ}日宮に落ち着く。

これが仲哀天皇の第二の皇宮で、いまの福岡市東区にあつたらしい。

九月――

熊襲を討とうと群臣に相談するが、神が皇后に乗り移って、

「不毛の地の熊襲など討つてもしかたがない。

それより宝がたくさんある新羅国に向かうべ

きだ。私を祀れば戦わずして帰服するだろう。

そうすれば熊襲も自然になびく」

――と神託を述べる。

この時点ですでに〈神功皇后〉が物語の主人公になっているのだが、仲哀天皇は山に登って遠くを見て、

「海が見えるだけでそんな国は見えない。それ

に、先祖の天皇たちは多くの神々を祀ってきたのに、さらに別の神がいるのはおかしい」

――といって神託を信じようとしないう。

皇后はまた神^{カミガカ}憑りになって、

「神を信じないのであればお前は国を保つことはできない。しかし皇后はいま身ごもっているので、その御^ミ子^コがその国を得るだろう」

――と神託を告げる。

仲哀天皇はそれでも信ぜず、熊襲を討ちに行くが、失敗してしまう。

ここで〈神功皇后〉の神託にあつた「宝」とは何か、であるが、玉や鏡の類ではなく、日本ではなかなか採取できない「鉄」であつたろうという説が有力である。

じじつ〈神功皇后〉五十二年――一二〇年加算で西暦三七二年――に、百^{クダラ}済王が大和朝廷に朝鮮の鉄の献上を誓う話がある。

また前にも述べたが、『三国志・東夷伝』にも、倭人が鉄を求めて朝鮮に来ている――という記述がある。

▽仲哀天皇九年〇（西暦二〇〇年／三二〇年）

〔天皇の不審な急死〕

二月――

この月の五日に、仲哀天皇は突然身体が弱り、翌日崩

御されてしまった。また、熊襲の矢に当たったのが原因だという別説が併記されている。

ただし『古事記』には、もつと不思議な話が記されている。

皇后と重臣武内宿禰タケウチノスクネの二人の立ち会いで天皇が神託を得るための琴を暗がりで弾くと、皇后に憑依ヒョウイした神が西へ行け——と託宣タクセンする。

しかし天皇は西は海ばかりだ、として熊襲征伐にこだわる。

神は怒って、

「この国はお前が統治すべきではない。お前は

黄泉ヨミの国へ行け」

——と述べたので、武内宿禰は再度琴を弾くように天皇にすすめ、天皇はしぶしぶ燈火を消して琴を弾いたが、しばらくして音が聞こえなくなった。

心配して明かりをつけると、天皇はその場で崩御されていた……という話である。

武内宿禰タケウチノスクネとは、第八代孝元天皇コウゲンの孫または曾孫ヒマゴにあたるので先祖は〈神功皇后〉と同じであり、第十二代景行天皇の時代から活躍を開始し、第十三代成務天皇オホオミと同じ日に生まれたため同天皇に寵愛されて大臣になり、仲哀

天皇の時代になってからもそれ以後も、百年以上にもわたって歴代天皇の大臣として朝廷で権力を振るった謎の重臣である。

厳密にいうと、景行・成務・仲哀・神功・應神・仁徳ニントクと六代にもわたって天皇の寵臣チヨウシンであり続けた。

『記紀』の年代のままだと二百年も働き続けたことになるが、崩年干支を元に実働を推定すると七十年ほどになるので、ありえない話ではない。

もちろん政治上手な一族が単一名で記されている可能性もある。

葛城カツラギ・巨勢コセ・平群ヘグリ・蘇我ソガなどの豪族たち（図7・7参照）が、武内宿禰の子孫を名乗っている。

この異様な急死事件については、武内宿禰が天皇を暗殺したのではないか——という説が古くから唱えられている。

明治天皇メイジの先代の孝明天皇コウメイがヒ素中毒に似た症状で不審な急死をとげた事件が、明治の重臣岩倉具視イワクラトモミの謀略による暗殺と推理されているのと似た、奇怪な事件なのである。

緊急事態を処理するため〈神功皇后〉と武内宿禰は相談して、武内がご遺体を船で穴門豊浦宮に運び、燈火も

用いずに極秘裏に仮葬し、人民には喪を秘した。

また万一の事態に備えて、中臣・大三輪・物部・大伴ナカトミ オオミワモノノベ オオトモという《大和》の豪族の首領である四重臣に命じて宮中の警備を嚴重にした。

物部・大伴は神武以来の重臣だし、中臣は藤原鎌足カマタリら藤原一族の祖でもあり、大三輪は日本最古の神社とされ卑彌呼に関係するとも想像される《三輪山》に関係する一族である。

つまり朝廷に協力する古代《大和》の代表的豪族が九州に集まっていたことになる。

これで仲哀天皇紀は終わりだが、仲哀天皇が〈神功皇后〉を介しての神託に背いて死んでしまうくだりが印象的である。

完全な女性上位なのだ。

また皇后がこの段階ではやくも再三にわたって靈感を発揮していることも印象に残る。

さらには、皇后と武内宿禰の仲が、天皇との仲よりも親密であることも、何やら暗示的である。

*

仲哀天皇が崩御されたこの年は、一二〇年加算では三二〇年になるが、崩年干支である壬戌ジンシュツをとると、前記のように三六二年になる。

かなりの開きがあるが、この時代ではまだ加算は一二〇年より大きいとも考えられるし、また崩年干支推定に無理があるとも考えられる。

しかし、前後の関係から、南原次男は実際の崩年は干支推定三六二年に近いのではないかと、推理している。

たしかに、三二〇年崩御では、〈神功皇后〉の治世が長すぎるように思われる。

*

このあと、『日本書紀』の記述は、〈神功皇后〉による疾風怒濤シツブウドトウの三韓征伐となる。

七・二

朝鮮の史書『三国史記』と

『好太王碑』にのこる

〈神功皇后〉の事績

◎百年の空白と朝鮮史書の中の日本

〈卑彌呼〉の後継者〈臺與〉が使者をシナ王朝に派遣した西暦二六〇年代から、三六〇年代の〈神功皇后〉による百済との交渉や派兵まで、ほぼ百年のあいだ、筋のおった大陸・半島との交渉記録は、内外のどの史書にも記されていない。

あるのは伝説的なものだけである。

しかしこの百年——垂仁・景行・成務各天皇の御代——の大和朝廷は、シナ王朝の権威を借りずに日本列島の

九州から東北までの地方豪族を帰順させることに腐心しており、また制度・境界・神社などによる列島統一の安定化に懸命になっていた時代なので、列島外との交渉が途切れていたのは、無理もないことである。

じつは朝鮮半島でも同じ時期に内部での統一が進み、楽浪郡・帶方郡などシナ王朝の植民都市が亡び、三韓も姿を変えて、半島を牛耳るのは北の高句麗、南東の新羅、南西の百済、および日本人が多くいた任那の四つの強国になっていった。

大陸でも三国時代の魏・蜀・呉がつぎつぎに滅びて西晋・東晋などが興亡した混乱期であった。

したがって、空白の百年の終わりに近い西暦三五〇年ごろには、日本列島を統一した大和朝廷と、朝鮮半島を分割支配した高句麗・新羅・百済三国とが、半島南端部の任那を間にして激突する要因ができあがっていた——ということになる。

さて、話を〈神功皇后〉にもどそう。

『日本書紀』における〈神功皇后〉とその皇子・應神天皇や孫の仁徳天皇についての記述の多くは、朝鮮との軋

轢^{レキ}や出兵に費やされている。

その信憑性^{シンビョウセイ}については、昔からいろいろな議論があるが、それを考えるには、朝鮮三国の正史である『三国史記』や、高句麗の王・好太王の事績を刻んだ『好太王碑』^{コウタイオウヒ}の碑文との比較が重要となる。

そこで『日本書紀』の本文に入る前に、この二つの史料で日本に触れている箇所を、抜粋しておこう。

『三国史記』は十二世紀に編纂された、高句麗・新羅・百済三国の史書である。

『好太王碑』とは、西暦四〇〇年前後に活躍した高句麗の王の業績を巨大な石に刻んだ碑文のことで、明治時代に日本人が発見して、古代史界に衝撃をあたえた超A級の史料である。

『三国史記』は十二世紀の編纂で『記紀』よりずっと遅いから疑問も多いし、また『好太王碑』は死の直後の顕彰のための碑文だから、美化もされているし、文章も短い。

しかしそれでも、『日本書紀』の記述の信憑性を判断するうえで、重要な史料となっている。とくに、実紀年推理には欠かせない。

以下の抜粋の紀年はすべて西暦である。

新羅本紀^{シラギ}（新羅の編年史）

前五〇年 倭人が辺境を侵したが、すぐ帰った。

一四年 倭の兵船百余隻が海辺に来たが防いだ。

一七年 倭人を追い払おうとしたが勝てなかった。

一二二年 暴風のとき倭人が攻めてきたとの噂。

一二三年 三月に倭国と講和した。

一五八年 倭人が贈り物を持って修好を求めてきた。

一七三年 倭の女王（卑彌呼^{ヒミコ}）が修好を求めてきた。

（このあたりの紀年には疑問もあるが注目すべき記述である。若いころの（卑彌呼）だったとしても矛盾はないからである）

二〇八年 倭人が侵入したので防いだ。

二三二年 倭人が城を包囲したが將軍の于老^{ウロウ}がうち破った。

二三三年 倭人が東辺を侵した。また于老が倭人の船に火をつけて破った。

二四九年 倭人が反撃にきて于老を殺した。

二八七年 倭人が一千名の百姓を捕虜にした。

二九二年 倭人が城を奪ったが、取り戻した。

二九四年 倭人が城を攻め、新羅は勝てなかった。

二九五年 百済とともに倭国を攻めようとしたが、海戦に不慣れで実現しなかった。

三〇〇年 倭国と使者を派遣しあつて修好した。

三一二年 倭国の王から、皇子の妃を求めてきたので、急利という人物の娘を倭に送った。

三四四年 倭国がまた妃を求めてきたが、断った。

三四五年 倭国の王が国交断絶を宣言してきた。

三四六年 倭人が城を包囲したが、食糧が尽きて退くのを待つて追撃した。

三六四年 倭人が大挙して攻撃してきたので、草人形数千をつくつて騙し、伏兵が待ち伏せして皆殺しにした。

三九三年 倭人が城を包囲したが、堅守し、追撃した。

四〇二年 倭国と修好し王子の末斯欣^{ミシキン}を人質として倭国に出した。

四〇五年 倭人が攻めてきたが、王が破った。

四〇七年 倭人が東辺と南辺を侵した。

四〇八年 倭人の基地のある対馬を攻撃しようとしたが、海を渡るのは無理で挫折した。

四一八年 人質の末斯欣が倭国から逃げ帰った。

四三一年 倭人が東辺の城を包囲したが退いた。

四四〇年 倭人が東辺と南辺に侵入した。

四四四年 倭人が城を包囲して食糧が尽きて退いたとき、王が追撃したが逆襲され、山に逃げて濃霧で助かった。

四五九年 倭人が兵船百余隻で東辺に来たが破った。

四六二年 倭人が城を破り、一千余名が捕虜になった。

四六三年 倭人が侵入したが退いた。

四七六年 倭人が東辺を侵したが破った。

四七七年 倭人が侵入したが破った。

五〇〇年 倭人が城を攻め落とした。

六七〇年 倭国が国名を日本と改めた。日の出る所に近いからだ——と自ら述べた。

(新羅本紀には弥生時代から天智天皇^{テンジ}のころまでの対日関係が継続的に記されているので興味ぶかい。人質の名前なども『日本書紀』と共通している)

百済^{クダラ}本紀(百済の編年史)

三九二年 高句麗の好太王に攻められて多くの城が落城した。

三九七年 阿花王^{アカ}が倭国と修好し、太子の直支^{トキ}を人質に出した。

四〇三年 倭国の使者が来たので厚遇した。

四〇五年 阿花王が死んだので直支は帰国を希望し、

倭国は兵士百名で護送してくれた。

四一八年 使者を倭国に派遣して朝献した。

四二八年 倭国から随^{ズイ}行五十人もの使者が来た。

六〇八年 倭国へ行く隋の使者が百済を通過した。

六五三年 倭国と修好した。

六六二年 唐・新羅連合軍と戦うため倭国と高句麗に援軍を請うた。

六六三年 滅亡した。

（百済本紀には古い記録は無いが『日本書紀』や『好太王碑』との対応は良好である）

列伝（人物伝）

二五三年

新羅の于老は第十代の王の王子だが、倭の使者の接待役になったとき、「倭の王を奴隸にし王妃を炊事婦にする」といったので倭の王（大和朝廷軍？）が怒って攻めてきて、于老は殺された。

その後第十三代の王（西暦二六二〜二八四年）のときに、于老の妻が倭の使者を酒に酔わせて焼き殺した。怒った倭人が攻めてきたが、勝てずに引き返した。

（新羅史の二三三、二四九年に対応）

四一二年

人質の末斯欣を取り戻すために倭に使者を送り、倭人を騙して帰国させたが、使者は追ってきた倭兵に捕まって処刑された。

このとき次の話を新羅は知った。

百済の使者が倭に来て「新羅と高句麗が共謀して倭国を侵そうとしている」と述べたので、倭は兵を出して新羅の国境外に巡回させたが、これを高句麗の軍勢が捕らえて殺した。

（新羅本紀の四一八年に対応するとともに、『好太王碑』とも『日本書紀』とも対応している）

『好太王碑』（高句麗の好太王の事績）

高句麗本紀には、シナ王朝や北方の国々、および百済や新羅との抗争の記録はあるが倭国や倭人は出てこない。好太王の治世の西暦三九二〜四一三年にも、百済を攻めた話があり、その百済は日本との連合軍だった可能性が高いが、倭人の明確な記録はない。

そこで、好太王碑文の記録を元に大体的様子を記す。

三九一年 倭が海を渡って、高句麗に朝献していた百済や新羅を破って配下にした。

三九六年 好太王が倭とむすんだ百済を討った。

三九九年 倭人が新羅の国境に満ち、城と池を破壊したので新羅が助けを求めてきた。

四〇〇年 高句麗軍が新羅の城に至ると、倭兵がその中に満ちていた。一度は退けたがまた占領されたので再度追い払った。

四〇四年 倭が高句麗支配下の帶方にまで侵入したが好太王自ら倭兵を壊滅させた。

四〇七年 高句麗軍が倭軍を破って戦果をあげた。

（これも『日本書紀』とよく符合している。すくなくとも大きな矛盾はない）

＊

以上の各紀年のうち、『好太王碑』のものはきわめて正確だとされている。また『三国史記』もシナ正史をひとつの基準にしている、事件の内容はともかくとして、時代は比較的正確らしい。とくに四世紀以降は信憑性が高い。

ざっと見て、新羅シラギは日本や高句麗コウクリ・百済クダラとのいざこざが絶えず、百済はつねに新羅と高句麗に攻められるので日本を頼って味方につけようとし、また高句麗は日本の配下になった百済や配下になりそうな新羅を攻めて日本軍を追い返しながらか領土拡張をはかり、日本は半島南端の任那ミマナを死守し拡大しようとはかる——といった複雑な国際情勢がわかってくる。

またもうひとつ注目されるのは、新羅本紀にある西暦二〇〇年前後の記述で、若いころの〈卑彌呼〉の時代にすでに日本人の集団や日本からの使者が新羅（とうじの辰韓）のあたりにまで進出していたことがわかる。

九州の国々（豪族たち）が《邪馬台国》の支配下にあったという『魏志倭人伝』の記録と照らし合わせると、この時代の使者や軍勢は〈卑彌呼〉が諸国に命じて派遣した可能性がじゅうぶんにある。

また于老なる將軍が登場する事変は、〈卑彌呼〉没年後——西暦二五〇年前後——に起こっているが、話がとても具体的に迫真力があつて興味ぶかい。

二五〇年から三〇〇年にかけての記述も、崇神・垂仁・景行三天皇の時代に照応しているようである。

一方〈卑彌呼〉よりずっと古い時代の倭人の記録は、倭奴国が後漢から金印をもらったり、倭王帥升が後漢に使者を派遣したりしたころのもので、九州の奴国や伊都国、あるいは出雲・但馬・大和などの勢力が独自に進出していた史実の反映だろうと推測できる。

大和朝廷の指示による正規の出兵がどのていどだったかは別にして、海を渡った日本人の勢力が朝鮮半島南部で——〈卑彌呼〉の時代よりずっと古くから任那周辺で——活躍していたことを十分にうかがわせる新羅本紀である。

＊

こういった『三国史記』や『好太王碑』を参考にしつつ、『日本書紀』の〈神功皇后〉の物語に入ることにしよう。

七・三

男装の〈神功皇后〉

疾風怒濤の海外遠征

〈神功皇后〉^{ジングウコウゴウ}は應神天皇^{オウジン}の摂政^{セツシヨウ}だが、実質的には天皇と考えられるので、ここでは仮に「第十四・五代」と記すことにする。

以下、その〈神功皇后〉の物語である。

第十四・五代〈神功皇后〉の物語（1）

——三韓征伐の成功

應神天皇の誕生——

国風諡号

氣長足姫尊^{オキナガタラシヒメノミコト}（諱^{イミナ}でもある）

漢風諡号

神功皇后^{ジングウコウゴウ}

〔摂政在位・西暦二〇一年～二六九年〕

〔降誕・西暦一七〇年／崩御・西暦二六九年〕＊

〔皇宮・磐余若桜宮他^{イワレワカサクラノミヤ}（奈良県桜井市池之内・他）〕

〔御陵・狭城盾列陵^{サキノタタナミノミササギ}（奈良市山陵町）〕

＊崩年干支は不明だが推定西暦三七五年前後

〈神功皇后〉の父親は、第九代開化天皇^{カイカ}の曾孫^{ヒマゴ}にあたる

氣長宿禰王^{オキナガノスクネノオオキミ}で、母親は葛城高額媛^{カツラギノタカヌカ}である。

父親の名の氣長^{オキナガ}は近江地方の地名で、開化記によれば開化天皇の玄孫^{ヤシヤゴ}だが、たいした違いではない。

第二章でも述べたが、氣長は息長とも書き、息が長い

——つまり海に長くもぐっていられるという意味だと考えられており、海洋に係のふかい一族を暗示している。

母親の名の額^{ヌケ}は額に似た意味の漢字で、葛城も高額も地名である。図5・2でいうと左方の山地に沿った部分である。

注目すべきはこの母親で、『古事記』では垂仁天皇^{スイニン}の御代に朝鮮から渡来した新羅王子^{シラギ}・天日槍^{アメノヒボコ}の五代めの子孫とされている。むろん、そうだとしても代々の妃は日本人だろうから、新羅の遺伝子はごく僅かではない。

このような高貴でかつ数奇な生まれの〈神功皇后〉は、幼児から美貌で利発で父親が怪しんだほどだったと記されている。

▽仲哀天皇九年1（西暦二〇〇年／三二〇年）

〔神託を告げた神々が明らかになる〕

二月――

前々節の繰り返しになるが、この月に天皇が崩御した原因は神託に従わなかったためだとして、群臣に命じて過ちを改めさせ、福岡県宗像^{ムナカタ}の近辺に斎^{イツキノミヤ}宮を造営した。斎宮とは、身を清め神に仕えて神託を受けるための御殿で、一般には任意の場所に設けるが、これを特定の場所に常設したのはじまりは、天皇家の皇女が派遣される伊勢神宮の斎宮である。

三月一日――

〈神功皇后〉は、斎宮に入って自ら神主となり、大臣・武内宿禰^{タケウチノスクネ}に琴を弾じさせ、審神者^{サニワ}――神託をわかりやすく解く人――も決めて、

「先に天皇に新羅征伐を命じた神の名をお教え

下さい」

――と懇請すると、七日七夜たつて、

「伊勢国の五十鈴宮にいます神……」

……天疎向津媛命^{アマザカルムカツヒメ}

――という答が得られる。

この神は〈天照大神^{アマテラスオオミカミ}〉の荒魂^{アラミタマ}である。

荒御魂とは、荒く猛々しい神霊で、柔和な徳を備えた神霊の和魂^{ニギミタマ}と対をなしている。

神々の霊はこの二つからなるというのが、古代の信仰である。

またその他にも神があるのかと問い、〈天照大神〉の妹または姫の稚日女尊^{ワカヒルメ}や、〈大國主神^{オオクニヌシ}〉の子どもの事代主神^{コトシロヌシ}など、いろいろ答があつたのち最後に、日向^{ヒムカ}の国の水底にいる、

「表筒男^{ウワツツノオ}、中筒男^{ナカツツノオ}、底筒男^{ソコツツノオ}」

――の名がでて終わる。

この三柱の神は住吉三神^{スミヨシ}といわれ、航海の安全を守る神であり、住吉神社に〈神功皇后〉とともに祀られている。

住吉神社は大阪など各地にあるが、福岡市住吉にある住吉神社が大元で、この三神は瓊瓊杵尊^{ニギハヤヒ}がそこに来たときに産んだ神である。

章のトビラ裏の後鳥羽上皇^{ゴトバ}の御製は、もっとも大規模な大阪の住吉大社に御拝されたときのものである。

・・・というわけで皇后は、神託に出た神々を鄭重に祀り、そののち熊襲クマシを討ちに行くと、熊襲は自然に服従してしまった。

三月十七〜二十日――

身体に翼が生えていて空を飛ぶ羽白熊鷲ハシロクマワシという賊が悪さをするので、橿日宮カシヒノミヤから出てこれを滅ぼした。

三月二十五日――

つづいて山門ヤマト――福岡県山門郡ヤマトで《邪馬台国ヤマトアイコク》の候補地のひとつ――に進み、土蜘蛛の田油津媛タブラツヒメを討伐した。

土蜘蛛とは大和朝廷に服従しない土着の住民のことであるが、首領が女性であることが面白い。

かつて史学会会長をつとめた明治の歴史家星野恒は、この田油津媛の先代が《卑彌呼ヒミコ》であろうと推理している。

▽仲哀天皇九年2（西暦二〇〇年／三二〇年）

〔神意をはかる皇后の奇跡〕

四月三日――

周辺の安定が得られたので、つぎに『魏志倭人伝キシワジンデン』の末廬国マツロに相当する松浦県マツラノアガタに進み、ここで朝鮮に遠征すべきかどうか、神意をうかがうために、縫い針で釣り針

を作り飯粒を餌にして川中の岩に登って、

「事が成就するなら川の魚よ、釣り針を吞め」

――と仰せて竿を投げると、たちまち鮎アユが釣れた。

これがこの地方で女たちだけが釣り針で鮎をとる習慣のはじまりで、この事績を踏まえたのが、第四章や本章のトビラ裏の歌など『万葉集』のいくつかの歌である。

なお、この鮎を見たとき皇后は「メズラシキ物」と仰せられたが、そこから「メズラの国」と呼ばれるようになり、それが訛ったのが松浦マツラの語源だと記されている。

このような一種の語呂合わせ的な地名語源説は『日本書紀』の随所にあるが、本書では割愛している。

つぎに《神功皇后》は、遠征を神に助けてもらうための神の田を儼ナノアガタ県につくるが、岩で塞がれて儼河ナノカワ（いまの那珂川ナカガワ）からの水路が作れない。

そこで武内宿禰タケウチノスクネに命じて神々に祈ると、落雷があつてその岩が裂けて水が通るといふ奇跡がおこった。

ますます自信をつけた皇后は、橿日宮カシヒノミヤにもどり、海辺に出て髪を解き、

「わたしは神祇ジンギの教えをうけ、先祖の霊を頼つて、海を渡って遠征しようと思う。もし靈験があるなら髪よ、分かれて二つになれ」

——と仰せて髪を海中に入れると、髪は自然に二つに分かれた。

この奇跡を皆に見せた皇后は、髪をまとめて、群臣に向かつて、

「自分は女であるが男子の姿となって雄大な計画をたてよう。神々の霊力と群臣の助けによって海を渡り、財宝の国を求めよう。もし成就したらそれは群臣の功績であり、成就しなかったら私一人の罪である」

——と告げた。

これに元気づけられた部下たちはみな協力を誓った。

▽仲哀天皇九年3（西暦二〇〇年／三二〇年）

〔遠征準備ととう〕

九月——

九月になると船や兵を集めるが、最初は兵がなかなか集まらなかった^{オオミワ}ので、大三輪社を建てて刀や矛を奉納すると、自然に集まるようになった。

これは《大和》の三輪山麓にある《大神神社》^{オオミワ}の分祀ともされており、福岡県朝倉郡三輪町の大己貴神社がそ

れといわれている。

古くから《大神神社》に祀られているのは《大物主神》^{オオモノヌシ}だが、これは《大己貴神》^{オオナムチ}や《大國主神》^{オオクニヌシ}と密接に関係した神である。

それから皇后は偵察隊を派遣するが、最初はその国を発見できず、二度目に行った人物が「西北に国があるらしい」と復命する。

そこで《神功皇后》は、出兵にあたつての大演説をおこなう。

その大意は、

「軍規を乱してはいけない。財物をむさぼり私心をいだと敵に捕らえられるだろう。敵が少数でもあなどるな。敵が強力でもひるむな。婦女を暴行するな。降伏する者を殺すな。戦勝を得たら褒賞がある。逃亡すれば罪になる」

——といったもので、古代の演説とは思えないほど合理的な内容である。

ここでまた航海神である住吉三神の次の神託がある。

「和魂^{ニギミタマ}は皇后につきそって命を守り、荒魂^{アラミタマ}は

先鋒となって軍船を導くだろう」

そこで皇后は拝礼し、神主を定め、荒魂を招請して軍の先鋒とし、和魂を招請して旗艦の鎮守とされた。

このとき、〈神功皇后〉は臨月になっていたが、石を取って腰にはさんで抑え、

「事を成就して帰還したらこの地で生ませてく

ださい」

——と祈った。

そのときの石はいま、伊都^{イトノアガタ}県の道のほとりにある——と記されている。

この県は『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}の伊都^{イト}国であり、このときお腹にいたのが、巨大な前方後円墳で知られる、次代の應神^{オウジン}天皇である。

▽仲哀天皇九年4（西暦二〇〇年／三二〇年）

「いよいよ出発！」

図7・1に、〈神功皇后〉の実紀年あるいはその少し後の朝鮮半島の勢力分布を示す。

図のなかでも新羅^{シラギ}はのちに半島を統一する国で、したがって国力も強く、古代の日本にとってもっとも厄介な存在だったらしいことが、『記紀』の記述から知られるが、



図7・1 四世紀以降の朝鮮半島
(任那の勢力が拡大した時期)

〈神功皇后〉が向かう主な相手が新羅であることも、『記紀』に記されている。

〈神功皇后〉の遠征は三韓征伐という言葉でも知られるが、三韓とは図3・2に描いた馬韓^{バカン}・辰韓^{シンカン}・弁韓^{ベンカン}の三地域のことである。

〈神功皇后〉のころには各地域内の統一が進んで、馬韓^{マハ}は百濟^{クダラ}になり辰韓は新羅^{シラギ}になっていた。

さらに三韓のはるか北方から、騎馬民族国家の高句麗^{コウクリ}が南下してきていた。

三韓の残る一つは南部の弁韓だが、この一部は任那ミマナといわれる日本領として〈卑彌呼ヒミコ〉の時代から続いていたらしい。

三韓征伐の実態は、弁韓を狙う新羅を押し返して任那を弁韓全体に広げ、さらに拡大することにあつたらしい。（三韓の消長については第三章にくわしく記してある）

図7・1は、〈神功皇后〉から應神天皇の御代にかけてその領域を拡大した任那を描いている。

十月――

冬十月に対馬を出発して朝鮮半島の新羅に向かうと、天佑神助テヌコウシンジヨによつて風は順風となり魚は浮かび上がつて軍船を助け、櫂カイを使わなくとも船は進んだ。そして船に沿つた波が新羅の陸上にまで達した。

新羅王は国が海になつてしまうのかと怖れていると、軍船が海に満ち、軍旗が日に輝いているのが見えた。

新羅王は、

「東方の神の国である日本の天皇の神兵なのだ

ろう。防ぐことなどできない」

――といつて、白い絹の旗を掲げ自分を後ろ手に縛つて皇后の御船に降伏した。

そして、毎年日本に朝貢することを堅く誓つた。

〈神功皇后〉は新羅王を許して配下にし、その国の宝庫を封じ、地図・戸籍・文書を収めた。そして矛を新羅王の門に立てて証拠とした。

（降伏のしるしの白旗はこの時代から有つたのだが、旗についての日本最古の文書は、この〈神功皇后〉の話と景行天皇の九州討伐の話で、いずれも降伏・帰順の白旗である。これはシナ史書の影響らしい）

新羅王は微叱ミシキ己コ（『三国史記』の新羅史の未斯欣ミシキンに対応）

を人質ときめ、八十艘の船に日本に贈る財宝を積んで、皇后の軍船にしたがわせた。これ以後、つねに新羅から八十艘の朝献チハツがくるようになった。

この八十艘の朝献というのは、後の天皇の記録にも見え、〈神功皇后〉の遠征がその由縁らしいが、しかし新羅が大和朝廷にとつてじつに厄介な国であつたことも、『記紀』の随所にあらわれている。

新羅が降伏したので、半島のあと二つの大国、高句麗コウクリと百濟クダラも、とてもかなわないと見て、

「今後は自分たちを西蕃（西の未開の国）と謙

遜の言葉で自称して朝貢を絶やしません」

——と約束する。

こうして神の助けで功なった〈神功皇后〉は、宝物や人質などとともに凱旋する。

『日本書紀』には別説が二つほど記されていて、もっと生々しい争いの話もあるが、最終的には相手に頭を下げさせただけで、シナ王朝のように王一族を皆殺しにして征服するといったことはしていない。

十二月——

そして帰国してすぐの十二月に、石で抑えていたお腹の子ども、つまり應神天皇を——伊都イトノ県アガタまたはオウジン灘ナノアガタ県で——出産する。

またそのすぐあとで住吉三神が皇后に教えて、わが荒魂を穴門アナトの山田邑に祭るようといわれたので、皇后は神主を決めてその地に神社を建立した。

いまの下関市内である。

これが有名な男装の女帝〈神功皇后〉による三韓征伐と應神天皇誕生の伝説である。

*

この物語は、日本にとつてとても都合よくできている。だから戦後の史学界には、単なる空想譚だとする意見もある。

しかし最近のさまざまな研究によって、四世紀から五世紀にかけて、日本による朝鮮出兵と任那拡大があったことはどうやら確からしいので、その記憶を美化して描いたのが〈神功皇后〉の三韓征伐なのであろう。

具体的な話の多くは、今は失われている百済の古代史書を参考に行っているらしい。

年代的には、『記紀』では一二〇年加算で西暦三二〇年ということになるが、その内容は、内外の史料によってほぼ確実とされる西暦三七〇年前後や四〇〇年前後の大規模な出兵とよく似ている。

しかし南原次男の戦史的な研究では、大規模出兵には前哨戦があつた筈で、それが〈神功皇后〉の遠征だった可能性が高いという。

もしそうだとすると、『三国史記』とも一致する、仲哀天皇の崩年干支である三六二年の直後の可能性が高いと考えられる。

新羅本紀(232頁)でお気づきかもしれないが、西暦三六四年に日本軍が大挙して攻めてきたという記述がある。

これが三六二年の直後の〈神功皇后〉の遠征に該当しているのかもしれない。

日本軍が騙されて破れたことになっているが、新羅側を美化しているので、個々の勝敗の記録はあまり問題ではない。

その後任那が確立したことは史実なので、大枠としては日本の権益が広がったのであろう。

なお南原は、たくさんの魚が軍船を助けたという神話について、

「実際にも、魚群が漁船に群がる習性が、漁師によって確認されている」

——と述べている。

とうじの人たちもそのような現象を知っており、それを神話化して記述したのであろう。

*

〈神功皇后〉の物語はまだまだ続くが、小休止して、その事績の史実性を確認するために、『好太王碑』について

調べておくことにする。

七・四

『好太王碑』コウタイオウヒ 碑文による

三韓征伐の確認

大和朝廷による朝鮮南部の権益拡大が史実であることは、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』『住吉大社神代記』『勘注系図』カンチュウケイズといった日本の古典によっても充分に説明できるが、さらに決定的ともいえる史料がある。それは、図7・2に示した『好太王碑』コウタイオウヒ（廣開土王碑）の碑文である。

好太王とは高句麗コウクリの第十九代の国王で、在位西暦三九二～四一三とされているから、（神功皇后シンクウコウゴ）の三韓征伐の想定紀年とは違っており、おそらく次代の應神天皇紀オウジンの後半に記されている事変に対応しているのだろうが、四世紀から五世紀にかけての大和朝廷の半島進出が事実であることの証拠となっているので、ここですこし詳しく

記しておく。

『好太王碑』はこの好太王の業績を石に刻んだもので、王の死の二年後に建てられ、鴨緑江オウリョクコウの北側の高句麗王の城跡（図7・1上部）で発見された。

高さが七メートルに近く、太さが二メートルに近いという巨大な石碑で、その四面に碑文がある。

図7・2にその全景を示した。

これは明治の初めに日本陸軍の将校が見出し、ついで学者の知るところとなり、ほぼ解読がなされたが、そこに、日本の朝鮮進出を証明する驚くべき文章が刻まれて



図7・2 神功皇后の三韓征伐
を裏づける鴨緑江
北岸の好太王碑
（田中卓『教養日本史』
青々企画より）

いたのだ。

倭国^{ワコク}について記されたいくつかの箇所を、以下に記しておく。

百残新羅舊是属民由来朝貢

而倭以辛卯年（三九一年）来渡海破百残□□新羅以為臣民

六年丙申（三九六年）王躬率水軍討滅殘國軍□□首攻取

己亥（三九九年）百殘違誓與倭和

新羅遣使白王云倭人滿其国境潰破城池

庚子（四〇〇年）教遣步騎五萬往救新羅從男居城至新羅城倭滿其中官兵方至倭賊退・・・来背急追至任那加羅・・・安羅人戍兵拔新羅城□城倭滿倭潰城

甲辰（四〇四年）倭不軌侵入帶方界太王率兵自・・・平壤・・・倭寇潰敗斬殺無數
丁未（四〇七年）教遣步騎五萬・・・蕩盡所稚鎧・一萬餘領軍資器械不可稱數・・・

その意味を著者なりにおおまかに記すと、

西暦三九一年に日本人が海を渡って半島に来て本来高句麗の属国である筈の百済や新羅を破って配下にした。

西暦三九六年に高句麗の好太王は日本と結んだ百済を破って降伏させた。

西暦三九九年に百済は高句麗との約束を破って日本と修好して日本の助けを求めた。好太王は平壤（いまの北朝鮮の首都）に進出してこれに備えた。新羅の使者が高句麗に来て、日本軍が国境に満ちて城や池を壊しているので助けてほしいと述べた。

西暦四〇〇年に五万もの兵で新羅を救いに行くと、男居城から新羅城にいたるまで日本兵が満ちていた。日本兵はいったん退いた。任那地方の加羅まで追ったが、日本軍は任那の安羅国と協力し、また戻ってきて城を潰した。高句麗軍は再度日本軍を追ひ、九割を殺した。

西暦四〇四年には高句麗の勢力下の百済北方の帯方地域にまで日本兵が侵入したので、好太王自ら戦って海陸両面から挟み撃ちにして、平壤のあたりまで進出していた日本軍を破り、無数の日本兵を殺した。

西暦四〇七年にも五万の大軍で百済駐留の日

本軍を（平壤の近くで）撃破し、鎧兜一万余な
どを奪うという大きな戦果をあげた。

——といったことになる。

要するに騎馬民族国家の高句麗コウクリの軍勢が、任那ミマナを支配
し百済クダラを味方につけた日本の軍と、新羅シラギ方面や百済方面
や高句麗領土内で激しく戦った様子の記述である。

なにしろこれは、好太王の死後わずか二年という、生
々しい記憶が多くの人に残っている時に建造された記念
碑なので、その信憑性はきわめて高い。

もちろん好太王を顕彰する碑文なので、王を徹底して
美化している。

たとえば、任那がこのあと亡びるどころか拡大された
ままですつと残っていたことは、好太王の戦いが碑文ど
おりの戦勝ではなかったことを示している。

ただ、朝鮮半島の奥地——平壤は大陸に近い半島深部
である——で日本軍が戦ったという日本の史書の記述が
史実であったと明確にわかること、および、日本の史料
では不明確なその紀年がはっきり記されていること、が
じつに貴重なのである。

これは、『日本書紀』の記録と符合するほか、三韓の歴
史を記した『三国史記』にも、これに関係する記述が多
くみられることは、第七・二節の新羅史などにあるとお
りである。

また『日本書紀』にある《任那ミマナ》という朝鮮南部の日
本領土名が、高句麗王の碑文に明記されていることも、
興味ぶかい。

一部の学者による任那虚構説を、朝鮮半島の考古学的
史料が打破してくれているのだ。

この時代の日本と朝鮮の関係についての優れた概説が
あるので引用しておく。

出典は、田中卓『教養日本史』である。

・・・三世紀後半から急速な発展をみた大和
朝廷は、四世紀なかばには少なくとも近畿地方
以西の主要な地域の統一を完成していたと思わ
れる。そのころ、朝鮮半島においては、百済が
新羅・高句麗の圧迫を受けて、わが国に援助を
求めてきた。わが国は西暦三六九年半島に兵を
進めて弁韓の地を占領し、新羅を破って百済・
新羅を朝貢させて、南朝鮮に有力な地歩を築い
た。この弁韓の地におかれたのが任那の日本府

である。その後、四世紀末から五世紀の初めに
かけて、日本軍は高句麗と半島の各地で激しく
戦った・・・

(三六九年のことは後で記す)

この四世紀なかばから五世紀にかけての半島の事変を
投影しているのが『日本書紀』にある〈神功皇后〉と應
神天皇、さらには仁徳天皇の物語なのだが、日本が新羅
と百済と任那を支配下においた後の高句麗と日本軍の戦
いは、南下する高句麗が日本の勢力圏になった新羅や百
済を攻めたために起こった。

神功皇后紀の後の項にも出てくるが、西暦三七〇年前
後に百済日本連合軍と百済領土内で、また四〇〇年ごろ
に新羅領土内や高句麗百済国境付近で、さらにその後高
句麗が支配していた百済北方の帶方郡タイホウあたりで、激しい
争いがなされたのだ。

日本の史料も朝鮮の史料も自国を美化しているが、つ
き合わせることによって、三韓征伐やその後の朝鮮出兵
が史実であることが判明する。

したがって前述したように、〈神功皇后〉の三韓征伐の
伝承は、『好太王碑』に記された西暦四〇〇年前後の事変

やその前段階(三七〇ごろ)の事変の前哨戦だったと想
像できる。

年代的には、前記のように、三六〇年ごろだったので
あろう。

『好太王碑』の碑文の四〇〇年前後の事変は、天皇の崩
年干支カンシから推定すると、應神天皇オウジンの晩年、あるいは仁徳
天皇治世の初期らしいのだが、最終的には——つまり仁
徳天皇以後になると——任那地方ミマナは日本の所領として確
定し、百済クダラは修好して朝献国となったが、新羅シラギは朝貢し
ては反発を繰り返し、高句麗コウクリとはほとんど外交しないま
ま——という状態に落ち着いたようである。

そして、仁徳天皇は、三代にわたる朝鮮出兵による国民
の疲弊と経済の衰退に対処するために、大幅減税を断行
し、皇宮が破損しても税による修理をせず、これが善政
として『記紀』に伝えられて、「仁徳」という特別な天皇
号を追号されることになったのだ。

(仁徳天皇の御代の疲弊の理由について先生に質問され
た少年時代の昭和天皇が、御学友が答えられないなか、
ただお一人正解を述べられたというエピソードがある)

七・五

謎の多い

ジングウコウゴウ

〈神功皇后〉東征伝説と

『魏志倭人伝』からの引用

ギシワジンデン

『好太王碑』^{コウタイオウヒ}による、三韓征伐の史実性を確認したので、

〈神功皇后〉^{ジングウコウゴウ}の物語（撰政紀）^{セツショウキ}にもどることにしよう。

興味ぶかい記述が多く記されている。

第十四・五代〈神功皇后〉の物語（2）

——謎の東征伝承と

『魏志倭人伝』の引用——

△神功皇后摂政元年（西暦二〇一年／三三二年）

二月——

〔異母皇子の謀反と討伐〕

三韓征伐の翌年の二月、摂政としての本格的な活動をはじめた〈神功皇后〉^{ジングウコウゴウ}は、穴門豊浦宮^{アナトユラノミヤ}に移り、そこに仮葬してあつた仲哀天皇^{チュウウアイ}の亡骸^{ナキガラ}を持ち、誕生した皇子——のちの應神天皇^{オウジン}——を連れ、群臣を従えて瀬戸内海を通じて《大和》^{ヤマト}に向かった。

そのとき、皇子の異母兄にあたる仲哀天皇の妃の子どものうちの二人——麿坂王^{カゴサカノミコ}と忍熊王^{オシクマノミコ}——が、〈神功皇后〉に皇子が生まれたのを知り、天皇になるのは自分たちだから産まれた皇子を殺そうと決めて、明石に仲哀天皇の偽りの御陵をつくった。そして東国の兵を集めて皇后一行を待ち伏せした。

このとき——たぶん大阪か神戸のあたりで——吉凶を占うための狩りをしたところ、赤い猪が麿坂王を食い殺してしまった。そこで弟の忍熊王は後退していまの大阪住吉区のあたりに陣地をかまえた。

〈神功皇后〉はこのことを知り、武内宿禰^{タケウチノスクネ}に皇子を預けて南回りをさせ、和歌山市の紀ノ川河口に停泊させた。そして皇后一行はまっすぐに難波^{ナニワ}——いまの大阪湾の奥——に向かった。

ところがそのとき、皇后の船が旋回するばかりで前進しなくなってしまった。

そこで尼崎まで戻って神意をうかがい、教えをうけた結果、

〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ}の荒御魂を^{アラミタマ}広田国（西宮市大社町）、

その妹の稚日女尊^{ワカヒルメ}を生田長峽国^{ナガオノクニ}（神戸市中央区）、
事代主神^{コトシロヌシ}を長田国^{ナガタノクニ}（神戸市長田区）、

住吉三神^{ニギミタマ}の和御魂を大津（大阪市の住吉大社）

——にそれぞれ祀ったところ、船は無事に進みだした。
大和朝廷に關係の深い神々を祀ることによって、自分の実子が正統な後継者であることを主張していると解釈できるエピソードである。

忍熊王はこれを知って京都の宇治市まで退いて陣地を立て直した。

〈神功皇后〉は一直線に進んだのではうまくいかないと判断し、南に廻って和歌山市のあたりで皇子と合流してさらに南下し、そこで上陸して北へ向かい、いまの和歌山県那賀町^{ナカ}のあたりに軍をかまえた。

このあたりの話や経路は「神武東征伝説」ととても似ていて興味ぶかいのだが、さらに次に〈天照大神〉の「天の岩屋」に似た不思議な現象が起こる。

すなわち、世界が夜のように暗くなって、それが何日もつづいたのだ。しかもこのときの表現として、「天の岩屋」事件と似た言葉が使われているのだ。

これは不吉だということでその原因を調べると、二人の人間を一つの場所に葬ったためだと分かり、それを分けて葬り直すと、太陽が輝いて昼と夜の区別ができるようになった。

解釈としては、天に二つの太陽はなく、忍熊王より皇后の皇子が正統だという主張を暗示しているとされているが、いずれにせよこれは、

「〈卑彌呼〉Ⅱ 〈天照大神〉説」

——のところで述べた西暦二四八年の皆既日蝕に影響された説話とも考えられる有名な記述である。

また、〈神功皇后〉の想定される実紀年に近い皆既日蝕は、西暦三二八年と三八四年に起こっているもので、そのような日蝕が、この説話を生んだのかもしれない。

三月——

皇后は武内宿禰らに討伐を命じた。軍勢は紀伊半島を北上して忍熊王の陣地のある宇治川まで進んだ。そしてそこで武内宿禰は謀略を用い、相手を油断させてうち破

った。

この対戦の最中、忍熊王と武内宿禰の間で、幾度となる歌のやりとりがあつた。

十月――

忍熊王を破つて無事《大和》に帰着したので、十月に群臣は《神功皇后》を尊敬して皇太后と呼ぶことにし、この年を《神功皇后》の摂政元年とした。

（まぎらわしいので以下皇太后とは呼ばず皇后とする）

△神功皇后摂政二年（西暦二〇二年／三二二年）

〔仲哀天皇の埋葬〕

そしてようやく翌年のこの年、仲哀天皇の亡骸を河内の国^{ナガノノミササギ}の長野陵（大阪府南河内郡の長野西陵）に葬り祀つた。

△神功皇后摂政三年（西暦二〇三年／三二三年）

〔皇宮の建設〕

この年の一月、皇后の皇子^{ホムタワケノミコ}譽田別皇子（のちの應神天皇^{オウジン}）を皇太子にする立太子の行事をおこない、神武天皇^{ジンム}以来の由緒のある《大和》の磐余^{イワレ}に皇宮をつくり、これ

を若^{ワカ}桜宮^{サクラノミヤ}と名づけた。

場所はいまの桜井駅付近（図5・2、5・3および図8・1参照）である。

これによつて無事、正妻の長男が第十五代天皇と決まつたことになるが、古代の天皇の後継決定にはいつも確執がみられる。

△神功皇后摂政五年（西暦二〇五年／三二五年）

〔新羅の策略と皇后の怒り〕

三月――

この年の三月、皇后との約束どおり、新羅王^{シラギ}が朝献してくるが、人質の微叱^{ミシコ}己を取り返そうと「本土で妻子を官の奴隷にしているといふので確かめたい」と人質に嘘をいわせる。

それを真に受けた《神功皇后》は、勇武できこえた葛城^{カキ}襲津彦^{ラキツヒコ}を責任者として随伴させて人質を帰そうとするが、対馬のあたりで嘘がわかり、怒った襲津彦が新羅の使いを焼き殺し、いまの釜山のあたりの城を攻め落とした。

このとき捕虜となつて日本に來た人たちが、大和西方の山地近くの四つの村の祖であると書かれているが、これは史実に近いらしい。

『三国史記』では、新羅史の四一八年、列伝の四一二年の事項に対応している。

『日本書紀』では、一二〇年加算しても合わないが、何十年か後の事件をここに当てはめたように見える。

さて、これ以後は〈神功皇后〉は名前が出るていどで事績の記述はほとんど無くなり、三韓との厄介なやりとりの説明が何回も続く。

これらは、朝鮮半島との外交の困難性をあらわす切実な物語である。

半島との折衝の難しさは、近現代にはじまったものでもなく、秀吉の時代にはじまったものでもなく、さらに元寇の時代にはじまったものでもない。じつに神話の時代から続いているのである！

またこのあとの神功皇后紀には『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}や『百濟記』などの歴史書が再三引用されているが、『百濟記』は『日本書紀』の引用でのみ断片が知られる幻の史書であって、本国の朝鮮半島にはまったく残っていない。

朝鮮本国に残る最古の史書は、これまで何度か言及した『三国史記』だが、これは『記紀』の四百年以上のちに編纂されており、『記紀』も参考にしているらしい。

このあとの事件はごく簡単に記し、『魏志倭人伝』の引

用は重要なので、全文を記す。

△神功皇后摂政十三年（西暦二一三年／三三三年）

〔皇后と武内宿禰のかけあい〕

八年とんでこの年、皇后の意向で武内宿禰^{タケウチノスクネ}は皇太子を連れて敦賀^{ツルガ}（ツヌガ）の気比神宮^{ケヒ}に参拝し、そのあと皇太子のための大宴会を催し、そこで〈神功皇后〉と皇太子の代理の武内宿禰が歌のやりとりをした。

この二人はまるで夫婦のように仲が良いのだ！

△神功皇后摂政三十九年（西暦二三九年／三五九年）

〔『魏志倭人伝』の引用1〕

二十六年もとんでこの年、次の重要な記述がある。

「魏志ニ云ハク、『明帝ノ景初ノ三年ノ六月、倭

ノ女王、大夫難斗米等ヲ遣シ、郡ニ詣リテ、

天子ニ詣リ朝獻セムコトヲ求ム。太守劉夏、

吏ヲ遣ワシテ将テ送リテ、京都ニ詣ラシム』

トイフ」

これは第三章に記した『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}の記述そのものである。この年の皇紀は西暦に換算すると二三九年になるので、それも一致している。

ただし現存する『魏志倭人伝』では景初二年になっている。また斗は升になっているし、劉の字もすこし違っている。写本を繰り返すうちにどこかで違ったのである。どれが正しいかは不明だが、紀年については、大陸の政治情勢からこちらの景初三年の方が正しいとされている。

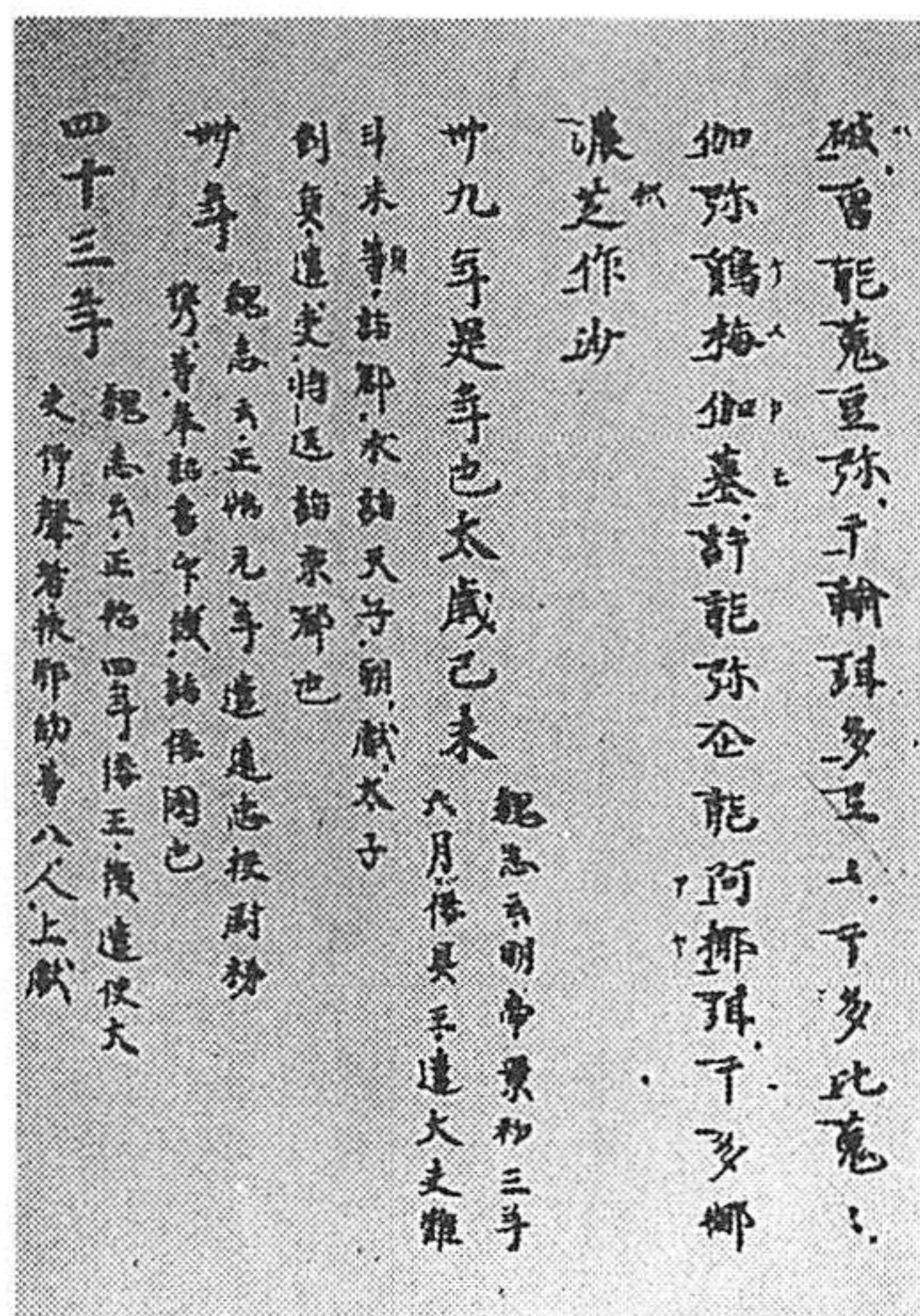


図7・3 『魏志倭人伝』を引用している『日本書紀』の部分
(『神道大系古典編二』
神道大系編纂会より)

いずれにせよ『記紀』編纂の時代にすでに日本の歴史家が『魏志倭人伝』を読んでいたことがわかるし、そのなかの女王〈卑彌呼〉が〈神功皇后〉のことだと信じていたらしいことも分かって興味ぶかい。

図7・3に『日本書紀』のこの部分を示した。

△神功皇后摂政四十年（西暦二四〇年／三六〇年）

〔『魏志倭人伝』の引用2〕

この年にも『魏志倭人伝』からの引用がある。

「魏志ニ云ハク『正始ノ元年ニ、建忠校尉梯携等ヲ遣シ、詔書印綬ヲ奉リテ、倭国ニ詣ラシム』トイフ」

これも第三章の『魏志倭人伝』の記述そのものである。ただし銅鏡百枚はじめ宝物を贈ったという個所は引用されておらず、『記紀』編纂時代の考え方が知られる。

△神功皇后摂政四十三年（西暦二四三年／三六三年）

〔『魏志倭人伝』の引用3〕

三度目の『魏志倭人伝』の引用がある。

「魏志ニ云ハク『正始ノ四年、倭王、復使ノ大
夫伊聲耆、掖耶約等八人ヲ遣シテ上獻ス』ト
イフ」

これも『魏志倭人伝』の記述そのものである。
ただし前と同様、人名については大夫伊聲耆の耆が者
となっていて少し違っている。きわめて似た文字だから
どこかで間違えたのであろう。

＊

『日本書紀』の編纂者たちまたは少し後の注釈者たちが、
〈神功皇后〉を〈卑彌呼〉に照応しようとしていたこと
が明白にわかる、驚くべき引用である。

（当時の歴史家たちが「〈卑彌呼〉」Ⅱ〈神功皇后〉説」に
たっていたとすると、『三国史記』の新羅本紀にある〈卑
彌呼〉の時代の于老ウロウとの戦いなどの記述が『記紀』に記
されていないのは、それを〈神功皇后〉の事績として三
韓征伐の物語に混ぜてしまったからだ——という推理も

成り立つであろう。あくまでも推理であるが・・・）

七・六

任那^{ミマナ}日本府の設置と

新羅^{シラギ}との軋轢^{アツレギ}

このあとも外交交渉の記録を中心に、簡単化して記すが、とくに重要なのが、一二〇年加算で三六九年になる摂政四十九年の、任那^{ミマナ}日本府の設置である。

第十四・五代〈神功皇后〉の物語（3）

——任那日本府の設置

『百濟記』の引用——

△神功皇后摂政四十六年（西暦二四六年／三六六年）

〔百濟国との国交樹立の記録〕

三月——

〈神功皇后^{ジンクウコウゴウ}〉が、任那の新羅^{シラギ}寄りの中央部にある卓淳^{トクジュン}国に使者を送ったとき、その国の王が、

「百濟^{クダラ}の国王が修好の使者を日本に送ろうとしたが道に迷ってこの国に来てしまった」

——と話した。

そこで日本の使者が従者を百濟に派遣したところ、百濟王はとても喜んで、宝物を日本に献上したいと述べた。

この摂政四十六年の記録は、百濟との修好の始まりを語る伝承だが、その紀年は、一二〇年加算を当てはめると、百濟王の使者が迷ったのが西暦三六四年、日本が使者を送ったのが西暦三六六年となる。

（三韓征伐実紀年の数年後と想像される）

『三国史記』では近肖古王の時代で、大陸の晋^{シン}や新羅と修好した記録があるので、善隣外交を展開していたのであろう。

卓淳国とは図7・1の任那の東部にあり、後に新羅に編入されたが、新羅と百濟を隔てる攻防の要衝である。スポーツ大会で話題になるいまの大邱市である。

△神功皇后摂政四十七年（西暦二四七年／三六七年）

〔新羅が百濟の貢ぎ物を奪う〕

四月――

約束どおり百済の使者が朝貢に来、同時に新羅の使者も来朝した。

ところが百済の貢ぎ物がとても貧弱だったので質問すると、

「途中で新羅に捕らえられて交換させられた」

――と答えた。

そこで、誰を百済に派遣して真偽を調べたらいいかと
アマテラスオオミカミ
〈天照大神〉にたずねると、千熊長彦チクマナガヒコを使者とすればよい――との神託があつた。

そこで千熊を新羅に派遣して、朝貢物のすり替えを責めた。

千熊はこの時代の天才的な外交官であり、この天才の力によつて日本は朝鮮南部の權益を確保したといつても過言ではない。

この千熊派遣は、百済とはうまくいつているが新羅と
アツレキ
は軋轢がつづいてゐることを示す伝承だが、この事件のあつた年は一二〇年加算で西暦三六七年である。

ここで百済の幻の史書『百済記』クダラキの引用がはじめて出てくる。

この部分では、千熊長彦が『百済記』でどう書かれて

いるかが述べられている。それによると職麻那那加比跪チクマナナカヒクと記されていたらしい。

日本の「彦」が、『魏志倭人伝』キシワジンデンでは「卑狗」、『百済記』では「比跪」ヒクとなつてゐるのはおもしろい。

『百済記』と現在まで伝わる『三国史記』とでは編纂紀年に数百年以上の違いがあるので、これが『三国史記』の百済本紀にどう影響しているかは不明である。

『百済記』はこのあとも再三引用されている。

△神功皇后摂政四十九年（西暦二四九年／三六九年）

〔新羅派兵と任那平定〕

三月――

この年の春、任じられた二人の將軍や千熊長彦ら関係者たちが海を渡つて、攻防の要衝卓淳国トクジュに集結し、卓淳や百済と協力して新羅をうち破つた。

それから七つの国を平定した。

これは任那七国と呼ばれ、大ざつぱにいつて図3・2の弁韓、図7・1の任那とされているあたりの主要な国々である。

国名を記すと、

火自焔ヒシホ

南加羅アリヒシノカラ

倭国^{トクノクニ}

安羅^{アラ}

多羅^{タラ}

卓淳^{トクジュ}

加羅^{カラ}

——の七国である。

『好太王碑』^{コウタイオウヒ}や『魏志倭人伝』^{キシワジンデン}の解釈でお馴染みの名が
ならんでいる。

いずれも、現在の韓国の慶尚南北道の一部にある国で、
一国あたりにすれば、いまの日本の郡以下でいどの規模
である。

この時代の任那地方（弁韓）が、集落が点在するとい
ったていどの地域であり、独立した大きな国に日本が攻
め入ったわけではないことがわかる。

さらに、この七つの国のほかに、^{トムタレ}枕弥多礼を支配下に
おいて、^{サイシュウトウ}百済に譲った。現在の済州島である。

これによって大和朝廷は任那に^{ミマナニホンフ}任那日本府を置くこと
ができ、半島南部の国々を統治する基礎をつくったこと
になる。

朝鮮半島における日本の権益を確立したのだ。

日本に新羅を抑えてもらった百済王は喜んで、

「今後は常に自分を卑下して西蕃^{セイバン}と称し、春秋
に日本に朝貢します」

——と誓った。

これは、日本列島内の統一過程で力をつけた將軍たち
の成果であるとともに、外交の天才・千熊長彦の努力の
成果でもあった。

この事変は、一二〇年を加算すると、前掲田中卓の文
章のとおり、西暦三六九年のことになる。

だから、『日本書紀』の記述をそのまま受け入れて一二
〇年加算すれば、〈神功皇后〉は西暦三二〇年と三六九年
の二回にわたって南朝鮮に派兵したことになるが、皇后
紀は引き延ばされているため、三六〇年代に二度の遠征
があったのだろうと推理できる。

△神功皇后摂政五十年（西暦二五〇年／三七〇年）

〔百済から感謝の使者が来る〕

二月——

新羅征伐に派遣されていた將軍が帰国。

五月——

^{チクマナガヒコ}千熊長彦^{チクマナガヒコ}も帰国したが、このとき百済の使いも一緒

だったので、〈神功皇后〉がその理由を質問すると、日本

への感謝のために来たのだという。

〈神功皇后〉は喜んで、任那地方にある河口の城を贈り、百済と日本を往復するときの宿駅とさせた。

△神功皇后摂政五十一年（西暦二五一年／三七一年）

〔百済の朝貢と日本の返礼〕

三月――

百済からまた使者がきて朝貢した。

〈神功皇后〉は皇太子や武内宿禰タケウチノスクネと相談して、千熊長彦を返礼の使者として百済に派遣した。

百済の王は平伏して感謝した。

（すでに皇太子つまり應神天皇オウジンが事実上のリーダーだったことがうかがえる）

このあたり、全体として、新羅シラキに手こずり、南下する高句麗コウクリにも危機感を抱き、利害の一致する百済クダラと組んで朝鮮半島での権益を守ろうとする大和朝廷の外交戦略が読みとれる。

七・七

七枝刀ナナサヤノタチの献上と

〈臺與トヨ〉の時代の使者派遣

前節の続きであるが、ここには百済クダラから「七枝刀ナナサヤノタチ」が献上されたという重要な記事があり、また〈卑彌呼ヒミコ〉の後継者の〈臺與トヨ〉ではないかと想定される晋シンへの使者派遣の記録が記されている。

第十四・五代〈神功皇后〉の物語（4）

——注目すべき七枝刀と

『起居注』の引用——

△神功皇后摂政五十二年（西暦二五二年／三七二年）

〔百済が七枝刀を朝献〕

九月——

この年は一二〇年加算で西暦三七二年にあたるが、秋九月に、きわめて重要な貢ぎ物が百済王からもたらされた。

すなわち、千熊長彦チクマノナガヒコが九月に帰国するが、常に往復していた百済の使者と一緒に来朝して、七枝刀ナナサヤノタチ・七子鏡ナナコノカガミなどの貴重な宝物を朝廷に朝貢したのだ。

そして、日本に対して最大限の賛辞を述べ、山でとれる鉄も献上すると約束した。

太刀と鏡の名にある七という数字は、じっさいに七つの部分から出来ているから付けられたものである。

日本と百済が任那ミマナ（弁韓）七国を平定し領土を拡大した記念に、七つの部分から出来ている特殊な宝刀や宝鏡を献上してきたのだ。

そしてこれ以後百済は、毎年かかさず朝貢に来た——と記されている。

この記述もまた、〈神功皇后ジングウコウゴウ〉と應神天皇オウジンおよび千熊らの外交戦略がうまくいっていることを示している。

事実日本と百済の友好関係は、白村江ハクスキノエの戦いで日本が唐トウと新羅シラギに破れて百済が滅亡するまで三百年もつづくこ

とになる。

さてここで、とくに重要なのは、「七枝刀」という献上品である。

これはじつは奇跡的に現在にまで残り、奈良県天理市——つまり古代《大和》のやや北部——にある《石上神宮》の社宝として厳重に保管されている。

もちろん厳しい鑑定に耐えた国宝である。

しかもこの宝刀には銘文が刻まれており、そこに年号もあるので、《神功皇后》時代の実際の紀年を定める重要な証拠品となっているのだ。

この件については、あとの節で詳しく解説する。

△神功皇后摂政五十五年（西暦二五五年／三七五年）

〔百済の肖古王の死去〕

百済の肖古王が崩じたとの記述のみ。

この年は一二〇年加算で西暦三七五年になるが、『三国史記』の百済本紀にある近肖古王の死も西暦換算でまったく同一となるので、このあたりの一二〇年加算はかなりの根拠がある。

△神功皇后摂政五十六年（西暦二五六年／三七六年）

〔百済の次の王について〕

百済の肖古王の王子の貴須^{クイス}が次の王となったとの記述がある。

貴須は『三国史記』では近仇首王のこと。仇首と貴須で読みが一致する。

△神功皇后摂政六十二年（西暦二六二年／三八二年）

〔またも新羅征伐〕

この年は一二〇年加算で西暦三八二年だが、新羅^{シラギ}が朝貢しなかったので、懲罰すべく、葛城襲津彦^{カツラギツツヒコ}を將軍として派遣した。

襲津彦とは、摂政五年に新羅の人質が逃走したとき、追って新羅まで進軍した人物で、のちに娘の磐之媛^{イワノヒメ}命が仁徳天皇の皇后となり、また本人は武内宿禰^{タケウチノスクネ}の子ともいわれ、なにかと話題の多い重臣である。

この記事はここで唐突に終わり、あとは『百済記』からの引用文が長々と続く。

それによると、襲津彦^{ツツヒコ}——『百済記』では沙至比跪^{サチヒク}と書かれている——は新羅の美女によって籠絡され、逆に

任那北方にある加羅^{カラ}国を討ったので、加羅の人たちは百済に逃げた。加羅王の妹が《大和》に来てそれを報告したので、天皇（應神天皇？）は怒って別の將軍を派遣して加羅国を回復させた。襲津彦は密かに帰国したがやがて岩穴で死んだ——ということである。

かなり情けない日本の將軍の後日譚が記されているのだが、日本側の記録では襲津彦はもつとあとまで活躍しているので、『百済記』のこの記述は、真実味があるとしてももうすこし後——應神天皇紀十四年——のことなのかもしれない。

△神功皇后摂政六十四年（西暦二六四年／三八四年）

〔百済王の交替〕

百済の貴須^{クイヌ}王が没し、王子の枕流^{トムル}王が立ったとある。

この王は『三国史記』でも同漢字である。

△神功皇后摂政六十五年（西暦二六五年／三八五年）

〔百済王の後継争い〕

百済の枕流王が没し、王子が若かったので叔父の辰斯^{シンシン}が王位を奪った——とある。

この記述も『三国史記』とほぼ同一である。

△神功皇后摂政六十六年（西暦二六六年／三八六年）

〔重要な『起居注』引用〕

この年の皇紀をそのまま西暦に換算すると二六六年——すなわち《卑彌呼^{ヒミコ}》が死んだあとの《臺與^{トヨ}》の時代——に相当しているが、ここに、『魏志倭人伝^{キシワジンデン}》に關係する重要な引用文がある。

すなわち、晋^{シン}の『起居注^{キキョチュウ}』を引いて、

「是年、晋ノ武帝ノ泰初ノ二年ナリ。晋ノ起居

注ニ云ハク、『武帝ノ泰初ノ二年十月二、倭ノ

女王、詔ヲ重ネテ貢獻セシム』トイフ。」

——と記しているのだ。

訳を重ねて、というのは通訳を重ねることで転じて遠方の外国人が来ることを意味する。

この出典の『起居注』というのは、シナの皇帝の日記体の記録集で、現存するいくつかの文献にこれに似た記述が見られるそうである。

ただし「女王」というのはこの『日本書紀』の記述の

みらしい。

この『起居注』の引用は明らかに、『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}の最後の部分にある〈臺與〉^{トヨ}がシナ王朝に使節を送ったという記事に対応させたもので、『魏志倭人伝』の〈臺與〉の貢献には年号の記録がないから、『日本書紀』の編者たちはシナの史書を探して、晋の史書『起居注』のこの記事が該当している——と判断したのであろう。

〈臺與〉による使者派遣が西暦二六六年という推理は、ここから来ているのだが、この推理は賛同する学者が多い。

それから、これを「女王」とし、かつ、〈神功皇后〉の崩御の直前の記録にしたのは、『日本書紀』の編者たちが〈卑彌呼〉と〈臺與〉を同一の女王とともに〈神功皇后〉だとしていたことを意味している。

そうでなければ、まったく別の場所に記すか、または記さなかったであろう。

もちろんこれは推理であるが、この推理をさらに進めると、『記紀』が編纂された七〜八世紀の日本の学者たちの記憶のなかには、〈卑彌呼〉に相当する女帝は有ったが、その後継者としての〈臺與〉に相当する女帝は無かったし、その時参考にしたであろうさらに古い史書にも〈臺

與〉に相当する存在は無かった——ということになる。これはとても重要な事である。

△神功皇后摂政六十九年（西暦二六九年／三八九年）

〔〈神功皇后〉崩御〕

〈神功皇后〉^{ジンクウコウゴウ}がこの年の四月に稚桜宮^{ワカサクラノミヤ}で崩御された。

ときに数えて一百歳であつた。

そして十月に狭城盾列陵^{サキノタナミノミササギ}に葬られた。

これは今の奈良市山陵町で、奈良駅の北西四キロほどのところに墳丘長二八〇メートルに達する巨大な前方後円墳が残されている。

図7・4（a）に航空写真を示した。

すぐそばに一代前の成務天皇^{セイム}の御陵があるが、夫の仲哀天皇^{ウアイ}の御陵とは無関係な場所である。

この崩御年は西暦二六九年であり、一二〇年加算では、西暦三八九年である。

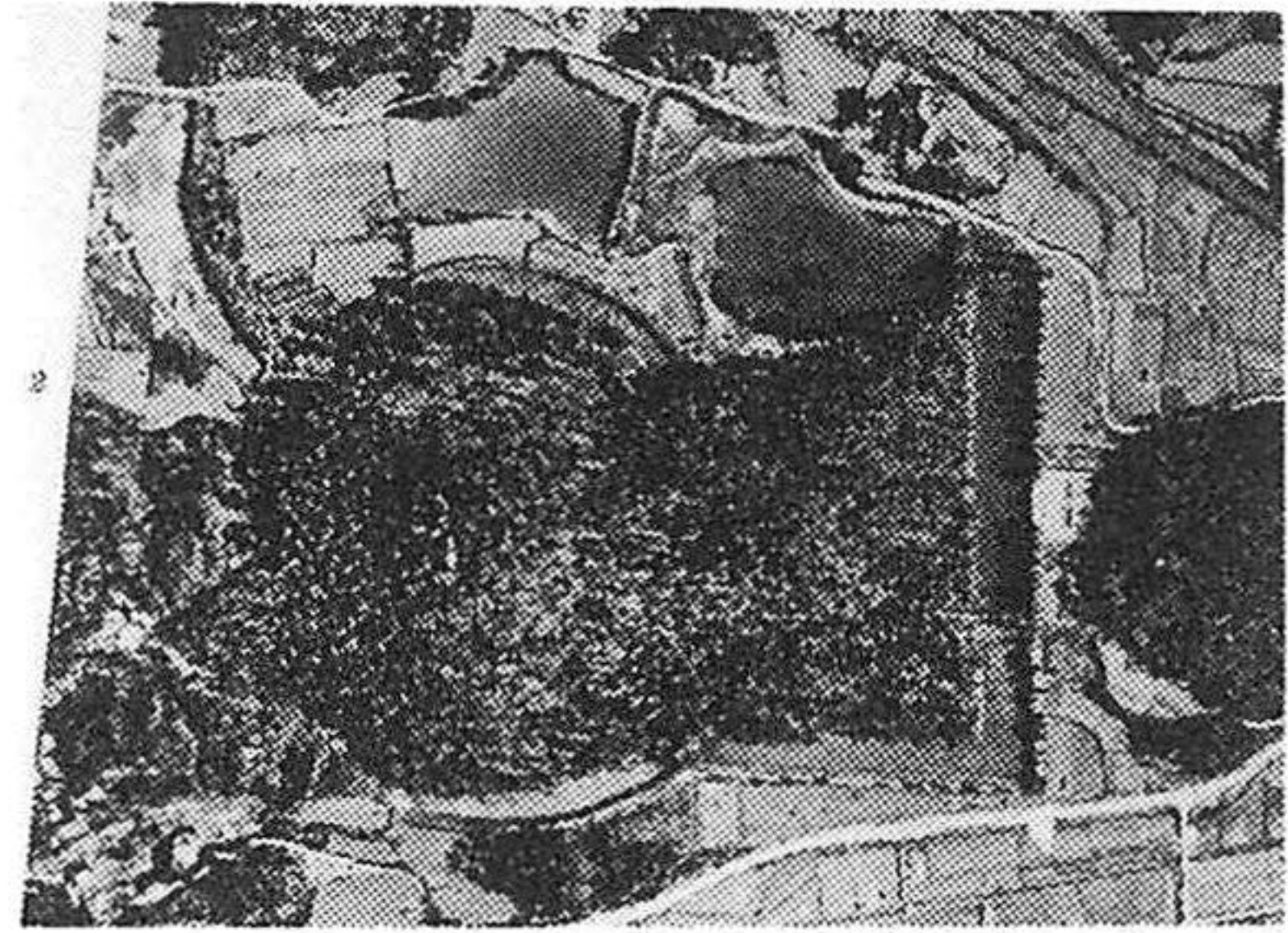
むろん、一二〇年加算が史実と合うのは三七〇年前後の事件であつて、その前は大幅に引き延ばされ、その後もかなり延長されていると考えるべきであろう。

想像しかできないが、後半部分の多くは、次の應神天皇^{オウジン}が実権を握ってからの事項だろうという説が有力であ

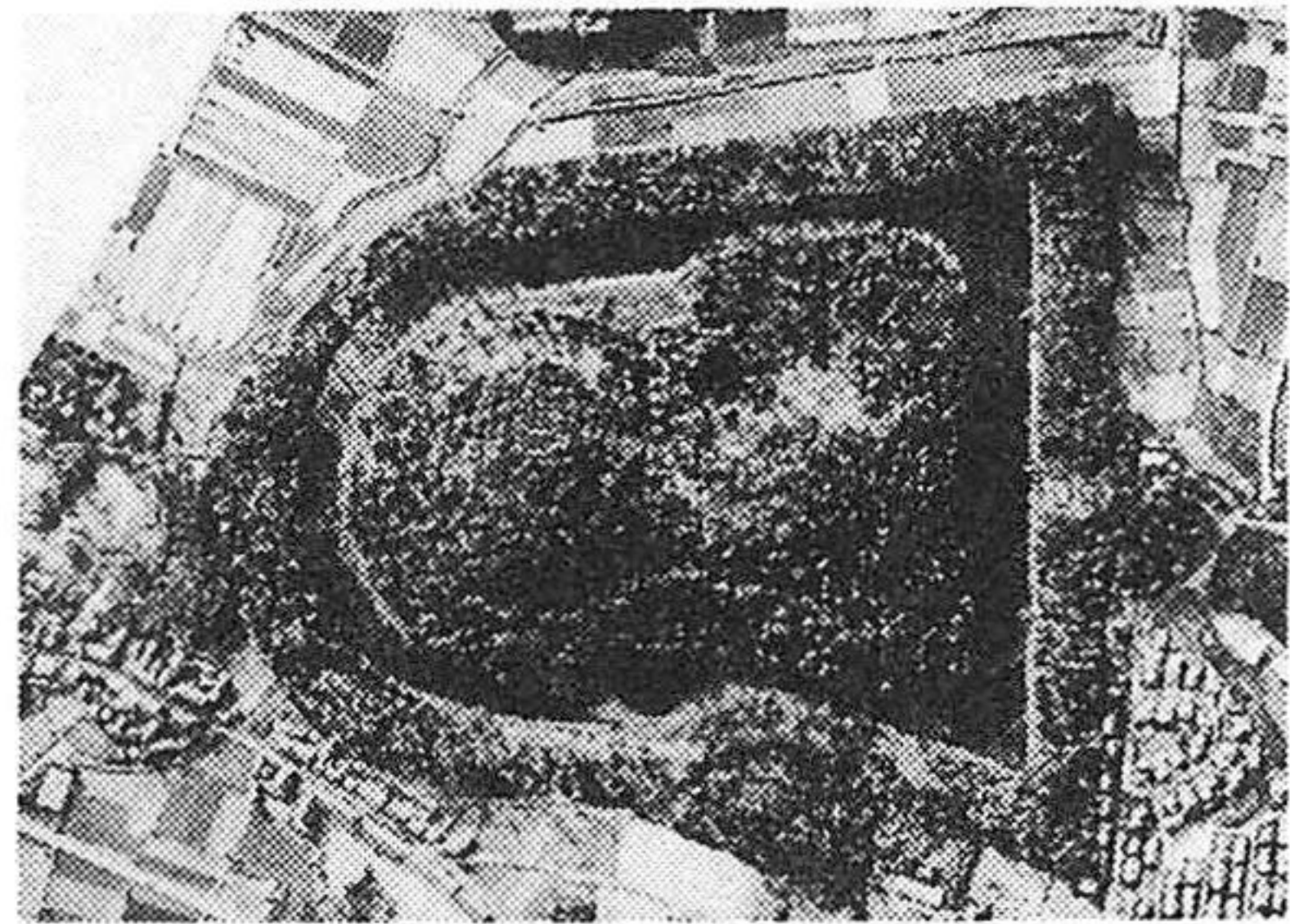
る。

いっばんに各天皇の年齢はもうすこし後の代まで、かなり引き延ばされているが、とくに〈神功皇后〉の崩御をこの年まで引き延ばしたのは、先の『起居注』の事績を〈神功皇后〉のものとするための苦肉の策だろうともいわれている。

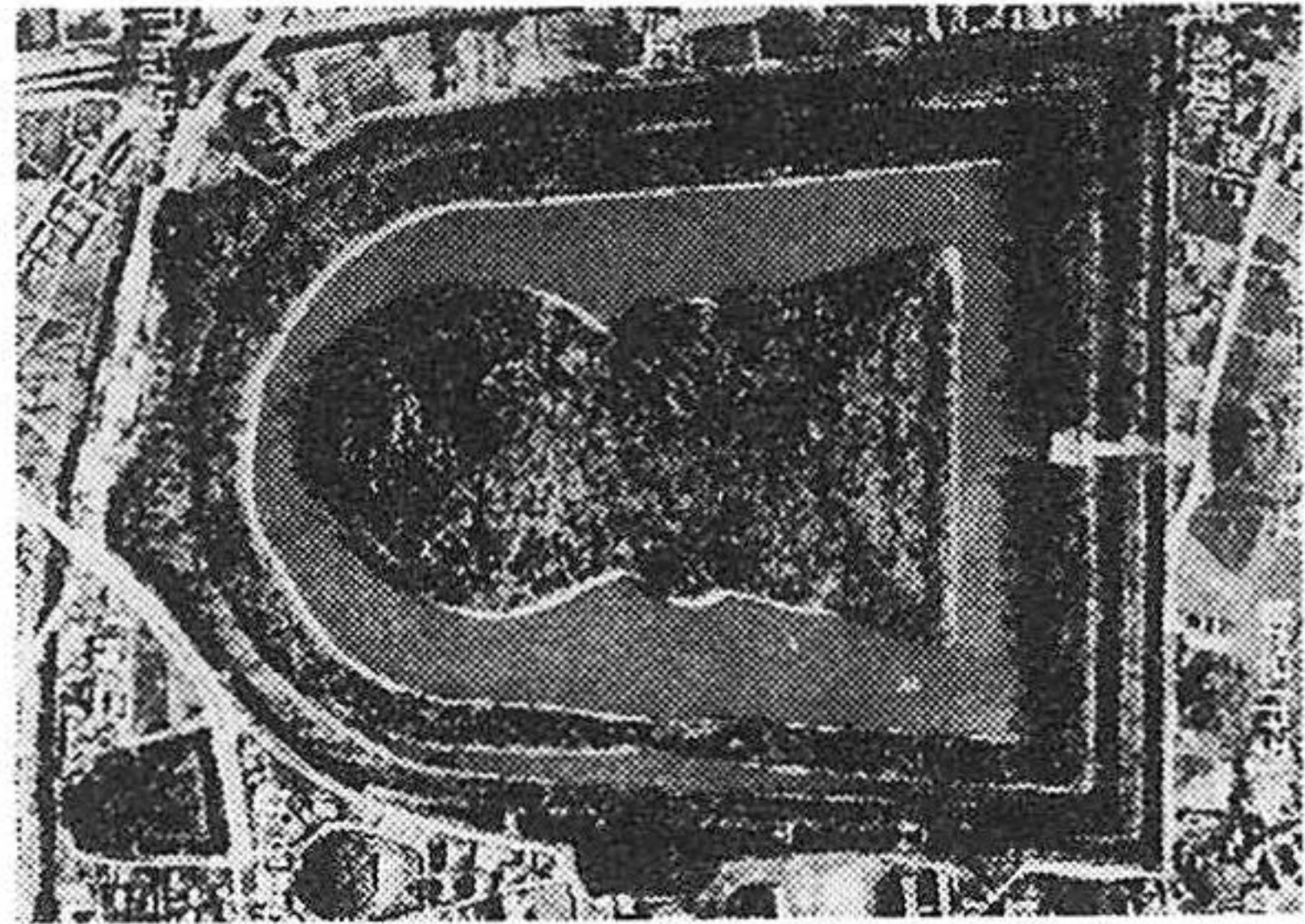
これもまた興味ぶかいことである。



(a) 神功皇后陵
(奈良市)



(b) 應神天皇陵
(羽曳野市)



(c) 仁徳天皇陵
(堺市)

図7・4 神功皇后陵と世界最大の
應神天皇陵・仁徳天皇陵
(末永雅雄『古墳の航空写真集』
学生社より)

◎〈神功皇后〉天皇説

これで神功皇后紀は終わるが、じつに面白い史料である。

朝鮮進出や新羅^{シラギ}との軋轢^{アツレキ}は外国の史書とも対応している。年代を変えて美化してはいるものの、それ以外の分野では、ふしぎなほど『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}に対応しているのだ。

また神武東征や（天照大神）の伝承ともよく似たところがある。

この記録が『魏志倭人伝』と大きく異なるのは、（卑彌呼）が魏に助けを求めたり朝鮮を魏の一部のように見ているのに対し、（神功皇后）は逆に朝鮮を攻めて朝献を要求し成功していることである。

（神功皇后）が事実上の天皇だったことは、『日本書紀』における特別な扱いからも明かだが、じつさいに『記紀』に匹敵するほど古い史料に「天皇号」をつけて尊称している例がたくさんある。

田中卓の資料などによれば、

摂津国風土記
常陸国風土記
播磨国風土記
住吉大社神代記
琴歌譜
扶桑略記
宋史日本伝

——などが、氣長足姫天皇あるいは神功天皇といった

尊称を使っている。

さいごの宋史日本伝は、シナの歴史家が十四世紀に、日本の使者から聞いた日本の歴史や地理を記した書であり、そこに神功天皇と書かれていることは、平安から鎌倉にかけての日本の役人が「天皇号」を用いて尊称していたことを意味している。

『記紀』の編纂者たちは、シナ王朝が伝統的に女帝を軽視しているのを知っていたので、大陸への宣伝効果を考慮して、女性天皇はなるべく秘匿しようとしたらしい。そこで、六〜七世紀の推古天皇から女性天皇が始まったとし、それまで天皇（大王）として記憶されてきた何人かの女帝を、皇后のまままで摂政にするとか、皇女という肩書きのままにするとかしたらしい。

『日本書紀』を読むと、その事績の記述から、（神功皇后）のほかになくとも二名の事実上天皇だったと思われる女帝が見つかる。

第七代孝靈天皇皇女で、第十代崇神天皇の前に女帝だったと考えられる（倭迹迹日百襲姫命）と、第二十二代清寧天皇の没後しばらく後継者が決まらなかったとき、実質天皇の位についた、第十七代履中天皇の孫にあたる

飯イトヨノアオ豊青尊である。

これに加えて、天智天皇の皇后だった倭ヤマトヒメノオオキミ姫王も、短期間ではあったが、天皇の立場だったという説もある。

＊

「へ卑彌呼」Ⅱ「神功皇后」説

——の妥当性の分析はあとにして、つぎに應神オウジン天皇紀をまとめてみよう。

七・八

八幡宮ハチマングウの祭神になつた

第十五代 應神天皇オウジンテンノウ

◎八幡宮の祭神になつた天皇

八幡宮ハチマングウという神社がある。古くはヤハタノミヤともいわれたし、ハチマン様という愛称もある。

日本は「神々の国」だから神社は無数にあるが、そのなかでも稲荷神社イナリに次いで多いのがこの八幡宮である。いまでも日本全国いたるところにあり、その数は神道辞典によれば二万五千である。また四万という資料もある。

全国の郵便局の数がほぼ二万五千だから、これに等しかか上まわる数である。

（ちなみに稲荷神社は三万二千、伊勢神宮の御分社は一万八千、天満宮は一万一千といわれる）

神社の数は摂末社や屋敷内社の数え方によって違ってくるが、八幡宮の数は末社まで加えるとさらに多くなるといわれている。

神社本庁に属している宗教法人としての神社総数が約八万だから、八幡宮の数がいかに多いかがわかる。

一説によると末社まで加えた全神社の半数に達するのだという。とにかくとても多い数である。

この膨大な数の八幡宮の代表格が、

宇佐八幡宮ウサ（九州大分県）

石清水八幡宮イワシミズ（京都）

鶴岡八幡宮ツルガオカ（神奈川県鎌倉）

——で、知名度では後二社であり、由緒としてははじめの宇佐（総本宮）である。

では、このとても多い数の八幡宮にはどういう神が祀られているかというと、それがこの節の主人公の應神オウジン

天皇なのである。

どの八幡宮も主祭神は應神天皇で、同時に〈神功皇后〉ジンクウコウゴウが祀られる場合が多い。

八幡宮は奈良時代からあるが、とくに平安後期になって源氏一族に崇拜されて盛んになった。

武士として拝むべき神とされたのだ。

〈神功皇后〉に続いて應神天皇もしばしば軍隊を海峡を越えて朝鮮半島に送って激戦しているの、軍事の神として、また海にかんする神として崇拜されたい。

源氏の武將の旗には「八幡大菩薩」といった文字が書かれることが多かったし、源氏の勇將として有名な源義家ハチマンタロウヨシエが八幡太郎義家と称したのもその信仰のためである。

「八幡」という独特の神社名の由来だが、應神天皇の御降誕にさいして天から多くの幡ハタが降った瑞祥によるという伝説がある。

また、幡は畑に通じる名だという説もあるし、宇佐神宮の場所の昔の地名だという説もある。

さらに、八幡のハタはワタと同じで、海を意味するワタツミから来ているという説もある。

以下、この膨大な数の神社の祭神となっている應神天皇の物語を記すことにする。

第十五代 應神天皇の物語（1）

——つづく朝鮮三国との確執——

国風諡号

ホムタノスメラミコト
譽田天皇

漢風諡号

オウジンテンノウ
應神天皇

〔在位・西暦二七〇年～三一〇年〕

〔降誕・西暦二〇〇年／崩御・西暦三一〇年〕＊

〔皇宮・磐余若桜宮（奈良県桜井市池之内）
イワレワカサクラノミヤ

カルシマトヨアキラノミヤ
輕島豐明宮（奈良県橿原市大輕町）

〔御陵・惠我藻伏岡陵（大阪府羽曳野市誉田）
エガノモフシノオカノミササギ

＊崩年干支推定は西暦三九四年

第十五代の應神天皇オウジンは、前記したとおり〈神功皇后〉の三韓征伐の直後に、神の加護があつたり、石で出産を抑えて戦つたりしたという神秘的な経過で、生まれた。だから、仲哀天皇チュウアイの皇子というよりもむしろ、住吉三神などの神の子どもを〈神功皇后〉が宿した——といった趣がある。

應神天皇はのちの追号だが、母親の〈神功皇后〉と二

代続いて「神」が名前につけられている事も注目される。

他に「神」がつく天皇は、初代の神武天皇ジンムと第十代の崇神天皇スジンだけなのだから・・・。

幼児から聡サトく凛々リンリンしく、弓を射るときに左腕にあてる軀ホムタのような逞しい肉が生まれた時からあり、それが母親の〈神功皇后〉が男装して軀をつけた姿に似ていたので、譽田別皇子ホムタワケノミコ（諱イミナ）と呼ばれており、そこから誉田天皇という国風の諡号オクリナができた。

應神天皇の出生譚はこのように神秘的だが、天皇になってからの記述はとても現実的で、絶大な権力をもつて日本国を發展させた強力な指導者だったとして、その業績が記されている。

〈神功皇后〉在世中の対外折衝も、後半は事実上この應神天皇が取り仕切っていたと考えられるのだが、即位後の記述も、まことにダイナミックなのだ。

なお一二〇年加算はしだいにずれてきていると思われるが、参考のために書いておく。

以下、應神天皇の事績を簡略化して記す。

▽應神天皇元年（西暦二七〇年／三九〇年）

〔《大和》で即位〕

正月一日――

〈神功皇后〉崩御の翌年の正月に、第十五代天皇として即位した。

一二〇年加算では西暦三九〇年のことである。

皇宮は最初は〈神功皇后〉のいた稚桜宮ワカサクラノミヤ（桜井市）のはずだが、皇后を定めたときに豊明宮トヨアカラノミヤ（橿原市）に遷ったのかもしれない。

いずれにせよ古くから大和朝廷が本拠とした《大和》ヤマトの地で、神武天皇はじめそれまでの多くの天皇の宮と同一地域である。

▽應神天皇二年（西暦二七一年／三九一年）

〔皇后の決定〕

三月――

この月、仲姫ナカツヒメを皇后に定めた。

この姫の祖父は、第十二代景行天皇ケイコウの皇子として有名な日本武尊ヤマトタケルや第十三代成務天皇セイムの弟にあたる五百城入彦皇子イホキリヒコノミコである。

つまり九州や東国までを支配下においた景行天皇の曾孫マゴにあたり、大和朝廷の実質的な確立者とされる第十代崇神天皇スジンの直系の子孫である。

仲姫には姉と妹がいたが、この二人も妃として仕え、結局三姉妹が應神天皇の皇子を生むことになった。

應神天皇の出生については、父とされる仲^{チュウアイ}哀天皇が影が薄くて幻の天皇かもしれないという説が一部にあり、真の父親は住吉神社の祭神——とされた人物——だろうという話もあるくらいなのだが、その真偽がどうであつても、皇后として由緒正しい大和一族の姫をたてたことによつて、大和朝廷の正統の後継者となつたわけである。仲姫は次の仁徳^{ニントク}天皇を生み、また多くの妃に合計して二十人『古事記』では二十七人の皇子皇女が生まれた。

▽應神天皇三年（西暦二七二年／三九二年）

〔百濟懲罰と蝦夷朝献〕

即位まもなく、対外的難問題がおこる。

この年、幼い王子を押しつけて不当に王位についたとされる百濟^{クダラ}の辰斯王^{シンシオウ}が失礼な行為をしたので、武内宿禰^{タケウチノスクネ}の四人の息子（いずれも武将）を百濟に送つて厳しく抗議した。

百濟では辰斯王を殺して陳謝し、遠征した日本の將軍たちは、正式の王子である阿花^{アカ}をたてて王とした。

この紀年は一二〇年加算では西暦三九二年になるが、

『三国史記』における辰斯王の死と阿花の即位もまったく同じ年になっている。

ただし『三国史記』での辰斯王は、高句麗^{コウクリ}からの攻撃で多くの領地を失い、それでも遊びほうけて狩りに行つて奇妙な死を迎えたとされ、阿花王も高句麗との戦いに苦勞している。

このころから『好太王碑』^{コウタイオウヒ}にある高句麗対日本の大激戦がはじまつたらしく、『日本書紀』にも『三国史記』にも、暗示的な記述が多くみられる。

十月——

東国の蝦夷^{エミシ}がこぞつて朝献してきた。そしてこの蝦夷に道路工事をさせた。

十一月——

各地の海人が騒いだので、統率者をきめて騒ぎを鎮めた。

（このあたり、強力な王権によつて九州から東北まで海陸ともに大和朝廷に帰順させていたことをうかがわせる記述である）

▽應神天皇五年（西暦二七四年／三九四年）

〔大規模な造船〕

八月――
海人部と山守部を定めた。

海産物を扱う部民や山林を監督する部民を定めて特権を与えたのである。

十月――

伊豆の国に命じて長さ十丈（約三十メートル）の巨船をつくった。名を「枯野」という。

朝鮮半島への渡航を想像させる記述である。

▽應神天皇六年（西暦二七五年／三九五年）

〔近江へ行幸〕

二月――

琵琶湖周辺の近江の国へ行幸して歌をつくった。

日本では、どんな無骨な天皇でも和歌を詠む。戦争や苦難のさなかでも詠む。

この伝統はいまに続いている。

▽應神天皇七年（西暦二七六年／三九六年）

〔渡来人が池をつくる〕

九月――

高句麗、百濟、新羅、任那の人たちが来朝したので、池をつくらせた。

高句麗人の帰化は珍しいが、『古事記』には記されていない。

この應神天皇紀から土木工事についての記録が多くなり、朝鮮半島の技術を導入して本格的な土木工事が可能になったことがわかる。

御陵もどんどん巨大になり、應神天皇陵や次の仁徳天皇陵にいたって世界一の巨大さを誇るようになる。

なお、一二〇年加算では、この年がすでに西暦三九六年になるが、一方天皇崩御の干支が記録されていてそれを西暦に直した崩御年推定は西暦三九四年である。

すなわち崩年干支推定ではこの年にはすでに應神天皇は崩御され、仁徳天皇の御代になっていたことになる。崩御干支による推定自体が誤差を含んでいるし、干支二回りの他にきてきとうな短縮伸長がなされているので、こういう矛盾はやむをえない。

ただ外交問題については、『百濟記』という実際の紀年がかなり正確だったらしい史書を参考にしているので、一二〇年加算ではぼ合うらしい。

すでに仁徳天皇になっていたかどうかは別にして・・・

▽應神天皇八年（西暦二七七年／三九七年）

〔百済の阿花王との確執〕

三月――

この年は一二〇年加算では西暦三九七年になるが、三月に百済人が来朝した――とある。

一方『百済記』の引用があり、そこには、阿花王が日本への礼を欠いて日本に攻められ土地をとられたので、使者を送って友好を復した――と記されている。

『三国史記』の阿花王アハカの記録には、次の三項の日本との関係が記されている。

西暦三九七年 倭国に人質として皇太子直支トキを出す

西暦四〇二年 倭国に使者を送って大きな珠を得た

西暦四〇三年 倭国の使者が来たので厚遇した

このあたりの何年かの朝鮮との外交・軍事問題は『三国史記』のほかに『好太王碑』碑文の年代ともおおむね一致しており、史実である可能性がきわめて高い。

應神天皇（および次代の仁徳天皇）が国内だけでなく朝鮮半島に対しても強力な外交と軍事力を発揮していたことがわかる。

▽應神天皇九年（西暦二七八年／三九八年）

〔武内宿禰の危機〕

四月――

武内宿禰タケウチノスクネが九州に派遣されたとき、弟の甘美内宿禰ウマシウチノスクネが天皇に讒言ザンゲンしたため兄弟の争いになるが、いろいろあった末、最後は兄が勝つ。

何代もの天皇に仕えた武内宿禰の遣り手ぶりがうかがえるエピソードだが、武内の九州派遣は、新羅の勢力が九州まで浸透するのを防ぐ目的があったと思われる。

弟の讒言は、兄が新羅と結託して九州に新しい王朝をつくろうとしている――という内容だったらしい。

＊

應神天皇紀オウジンのこの数年間の記述は、『好太王碑』コウタイオウヒにある「日本軍と好太王軍の血戦」にズバリ照応しており、大和朝廷の緊張もただならぬものがあつたと、推察できるのである。

七・九

論語の到来と船団の炎上 そして高句麗^{コウクリ}国書の破棄事件

第十五代 應神天皇の物語（2）

——学者王仁の来朝と

高句麗の非礼——

▽應神天皇十一年（西暦二八〇年／四〇〇年）

〔大池の造営〕

十月——

劍池^{ツルギノイケ}・輕池^{カルノイケ}・鹿垣池^{シシガキノイケ}・厩坂池^{ウマヤサカノイケ}をつくった。

当時獲得したばかりの土木技術によって、灌漑^{カンガイ}用の大きな池をつくったという記録なのであろう。

なおこの年にある人が、日向^{ヒムカ}の国に髪長媛^{カミナガヒメ}というたい

へんな美人がいる——と報告し、天皇は喜ばれた。

▽應神天皇十三年（西暦二八二年／四〇二年）

〔日向から髪長媛を招く〕

三月——

天皇は特別な使者を日向に派遣して髪長媛を召した。

九月——

髪長媛がやってきたので、桑津^{クワツノムラ}邑——いまの大阪市東住吉区らしい——に住ませた。

このとき、後に次代仁徳^{ニントク}天皇となる第四皇子の大鷦鷯^{オオサザギ}尊がこの媛と恋人どうしになってしまったため、天皇はこの媛を皇子の妃にすることにした。

このときの天皇と皇子の歌のやりとりが面白い。

この髪長媛が仁徳天皇の妃となって生んだ皇女が、のちの雄略^{ユウリヤク}天皇の皇后である。

また仁徳天皇が即位したのちに定めた皇后は、葛城^{カツラギ}襲津彦^{ツヒコ}の娘の磐之姫^{イワノヒメ}命であった。

このあたりの婚姻譚からは、神功^{ジンクウ}→應神^{オウジン}→仁徳^{ニントク}の系列が、大和朝廷やその周辺の豪族たちを取り込むために、さかんに姻戚関係を結ぼうとした形跡がうかがえる。

つまり、應神天皇は大和朝廷の開祖に直結する媛を皇

后や妃にしたし、つぎの仁徳天皇は大和朝廷以外の大和の豪族の媛を皇后にするとともに朝廷の先祖の地日向の媛を妃にしたわけで、母違いの兄を征伐した應神天皇系列としては、日本を統率する大和朝廷の正統的な後継者として認知されるために、万全の婚姻政策をとったのである。

▽應神天皇十四年（西暦二八三年／四〇三年）

〔百済からの渡来人〕

二月――

百済王が縫衣工女クダラキヌスイノオミナを献上してきた。着物をつくる技術を持った女性たちである。

またこの年、弓月君ユツキノキミが百済から来訪し、自分の配下の多くの技術者とともに帰化しようとしたが、新羅シラキに妨げられて技術者たちは加羅国カラ（任那ミマナの中心的な国）に留まっている――と訴えた。

弓月君は秦シンの始皇帝シコウテイの子孫と伝えられる、機織りハタオリの技術者集団の長で、日本にとってきわめて重要な人物であった。

そこで天皇は葛城襲津彦カツラギソツヒコを派遣したが、三年たっても帰ってこなかった。

戦いに明け暮れたことを想像させるが、この話はまたジングウコウゴウ《神功皇后》六十二年にある『百済記』の内容と一致しているようでもある。

また『好太王碑』コウタイオウヒにある西暦四〇四年の戦いと、年代がよく対応している。

この年は一二〇年加算で西暦四〇三年になるが、前述のように『三国史記』の阿花王アカのこの年の記録に、倭の使者が来たので大いに厚遇した――とある。

推理すれば、これは翌四〇四年の激戦の原因である。

▽應神天皇十五年（西暦二八四年／四〇四年）

〔王仁を招聘するために使者を派遣〕

八月――

百済王から良馬二匹が献上された。このとき同時に帰化した阿直岐アチキは学者だったので皇子が学問を習ったが、天皇が、お前より優れた学者がいるか――と訊ねると、

「王仁ワニがいます」

――と答えた。

そこで使者を百済に派遣して王仁ワニを招聘ショウヘイした。

▽應神天皇十六年（西暦二八五年／四〇五年）

〔王仁来朝と新羅との確執〕

二月――

百済から著名な学者の王仁^{ワニ}が渡来し帰化した。王仁は漢の高祖^{コウソ}の末裔とされ、論語を日本にもたらしたのも王仁だといわれている。

『古事記』には論語十卷をもたらしたとある。

教科書にも出てくる人物である。

この時代に多くの日本人が漢字を覚えてシナの学問を熱心に習得しはじめたことがわかるエピソードである。

またこの時期、さまざまな技術を持った人たちが来航して帰化した。この百済からの帰化人の増加は、百済^{コウゲ}が高句麗^{コウクリ}や新羅^{シラキ}との戦いに苦戦し、日本が出兵してこれを助けて任那^{ミナナ}を守っていたことと関係があるらしい。

これは日本側にとっても都合の良いことで、貴重な人材として尊重したことが分かる。大和周辺の各地に、帰化人を先祖とする伝説を持つ氏族がいる。

また十四年に派遣した使いが帰ってこない。新羅がじゃまをしているのだろうと、軍勢を派遣し、取り返す。

新羅や高句麗との軍事的な軋轢^{アツレキ}が何代にもわたって続いたことがわかるし、ひきつづいて『好太王碑』の記述とも対応している。

またこの年――一二〇年加算で西暦四〇五年――に百済の阿花王^{アカ}が崩じたので、天皇は、人質にしていたその王子の直支^{トキ}に、

「国に帰って王位を継ぐように」

――と告げた。

『三国史記』の直支即位の項にも同じ記述がある。

『日本書紀』は編纂時に『三国史記』の元になったらしい『百済記』などの史書を参考にした。同様な記事があることは当然でもあるが、しかし双方とも独自の伝承と矛盾していたら記さなかった。史実なのであろう。

八月――

武内宿禰^{タケウチノスクネ}の子である將軍・木菟宿禰^{ツクノスクネ}に軍勢をつけて加羅^{カラ}国に派遣し、新羅の国境まで進んで、新羅にじゃまされて帰れなかった襲津彦^{ソツヒコ}と弓月^{ユツキ}の技術者たちを帰還させた。

この事件もまた、『好太王碑』の碑文の終わりの方の戦いとよく照応している。

またこの話は、十四年の項にある弓月の一件とともに、秦氏^{ハタシ}一族の渡来伝承とされている。

高句麗の『好太王碑』にある倭軍を『日本書紀』のがわから見ると、その統率者としてもつとも有力な候補は、武内宿禰の四人の息子たちと、葛城襲津彦である。

そこで、襲津彦について、すこし記しておく。

勇猛ではあるが戦略眼はあまり無かったらしい襲津彦の出自は、『古事記』の第八代孝元天皇記では武内宿禰の息子で木菟宿禰らと兄弟とされているが、それはややあいまいである。

名前から判断して、葛城地方（図7・7）の豪族の出なのであろう。

能力的に疑問のあるこの襲津彦が重要な地位をしめていたのは、その娘の磐之媛命イワノヒメが、のちに仁徳天皇となる皇太子の妃（即位後に皇后）だったからである。

しかもこの磐之媛命は、履中リチヌウ・反正ハンゼイ・允恭インキョウという仁徳に続く三天皇を生んでいるので、襲津彦は三代もの天皇の祖父になったのだ。

▽應神天皇十九年（西暦二八八年／四〇八年）

〔吉野山中からの献上品〕

十月――

吉野宮に臨幸されたとき、吉野の山の人が酒を献上した。そしてこれ以後しばしば土地の産物を献上するようになった。

▽應神天皇二十年（西暦二八九年／四〇九年）

〔倭漢直の祖の帰化〕

九月――

大和南部の地を本拠として朝廷周辺でながく活躍した倭漢直ヤマトノアヤノアタイの一族の祖とされる親子が、多くの郎党を引き連れて帰化した。

この一族は弓月君とおなじく、大陸↓朝鮮↓日本と渡ったとされ、文筆などで活躍した。

のちに蘇我ソガの手下となって第三十二代崇峻天皇スシユンを暗殺したのは、この一族の一人とされている。

▽應神天皇二十二年（西暦二九一年／四一一年）

〔吉備国などへ行幸〕

妃の一人で吉備国キビ――現在の岡山県――出身の兄媛エヒメが両親のもとへ帰りがついているのを認めたことや、天皇自身が吉備国や淡路島などに行幸したことが記されている。

▽應神天皇二十五年（西暦二九四年／四一四年）

〔百済王直支の死〕

百済の直支王^{トキ}が崩じたが、王子が若かったので政治を重臣の木満到^{モクマンチ}がおこなった。しかし日本への無礼が多かったので呼びつけて叱った。

また『百済記』を引用して、木満到が任那を専横して天皇に呼びつけられたことを記している。

一二〇年加算ではこの年は西暦四一四年だが、『三国史記』では直支の死は西暦四二〇年とされている。

▽應神天皇二十八年（西暦二九七年／四一七年）

〔高句麗の無礼と皇子の怒り〕

九月――

西暦四一七年と推定されるこの年の九月、高句麗^{コウクリ}の王――この紀年を信じれば好太王の次の長壽王である――が朝献してきたが、その上奏文に、

「高麗^{コマノ}ノ王^{コニキシ} 倭^{ヤマト}ノ国^{クニ}ニ教^{ウシ}ウ^ノ」

――とあったので、皇子の菟道稚郎子^{ウジノワキイラツコ}が怒って文を破り捨てた。

高句麗^{コウクリ}は日本と友好関係にある百済^{クダラ}を北から侵犯しつ

づけ、新羅^{シラギ}を配下におこうとしている国なので、はげしくやりあっていたことが分かる。

高句麗からの使者がまともな交渉をするようになるのは、次の仁徳天皇^{ニントク}になってからである。

應神天皇の御代の終わりまでに任那^{ミマナ}日本府の權威が確立し、高句麗もそれを認めざるをえないようになったからであろう。

▽應神天皇三十一年（西暦三〇〇年／四二〇年）

〔新羅に焼かれた多くの新造船〕

八月――

この年また新羅がトラブルを起こす。

即位五年に伊豆の国につくらせた巨大な官船「枯野^{カラノ}」が古くなって使えなくなったので、後世に名を残すためにそれを燃やして塩をつくった。

なかにどうしても燃えない木材があったのでそれで琴を作ったところ、爽やかな音が遠方まで届いたので天皇が歌をつくった。

『記紀』にはこういうなんともいえず楽しい話がたくさんあり、古代日本人の芸術性を感じさせる。

さて、天皇はこの塩を諸国に配って、替わりの船を五百隻も集め、これらを武庫の港——いまの兵庫県尼崎市——に係留しておいた。

当然ながら、朝鮮半島に軍勢を送るための軍船である。

ところが、その近くにいた新羅の使者が火をつけて、多数の船を燃してしまった。

天皇は怒り、新羅王は謝って優れた技術者を献上した。これが猪名部^{イナベ}ら木工技術を生業とする一族の先祖であると記されているが、あいかわらず新羅との軋轢^{アツレキ}が続いていることがわかる。

▽應神天皇三十七年（西暦三〇六年／四二六年）

〔シナで縫工女を募集〕

使者を大陸江南の地——三国時代に呉^ゴのあったところ——に送って縫工女^{キヌミイヒメ}を募集する。

道が分からないので高句麗王の部下に道案内してもらって、無事四人の縫工女を獲得し、天皇崩御の年に帰国した。

さかんに技術導入をはかっていたことがわかる。

（雄略天皇紀にもほとんど同じような話があるので、混

同しているのかもしれない）

なおこの年は一二〇年加算では西暦四二六年だが、シナ正史の『宋書』に、西暦四二二年と四二五年に、倭王讃^{サン}の使者が来た——とある。

いわゆる倭の五王の筆頭である。

一二〇年加算どおりとすれば讃は應神天皇^{オウジン}であるが、崩年干支からの推定ではこの年にはすでに應神天皇は崩御されており、したがって次代の仁徳天皇^{ニントク}説が有力である。これは諱^{イミナ}からも推測できる。

その次の履中天皇^{リチュウ}という別説もある。

▽應神天皇三十九年（西暦三〇八年／四二八年）

〔直支王の妹の帰化〕

二月——

百済の直支王^{トキ}が妹を日本に派遣して、朝廷に仕えさせた。この妹は七人の婦女を従えていた。

この年は一二〇年加算で西暦四二八年だが、『三国史記』によれば、この年の百済王は直支の二代後になっている。しかしシナ史書の記述では直支の死の直前がこの年となっていて、矛盾はない。

*

『日本書紀』を見ると、朝鮮問題は結局、日本を頼りにした百済クダラとはうまくいったが、新羅シラギはいったん和睦したものの約束を違えることが多くて苦勞し、高句麗コウクリについては外交関係もおぼつかなかった——と推量される。

軍隊の面では、任那を守るために、また高句麗に圧迫される百済を助けるために、さらには反抗的な新羅に懲罰を加えるために、しばしば派遣され、その派遣軍が新羅軍および高句麗軍と激戦する——といったことだったらしい。

その抗争は、大和朝廷でいえば（神功皇后）から仁徳天皇の時代まで、高句麗の歴史でいえば好太王の即位前から死後まで、かなり長期にわたって続いたらしいことが、『日本書紀』や『三国史記』などの史書から読みとれる。

とくに新羅との軋轢はつぎの仁徳天皇の代になっても記されていて、歴代の天皇が朝鮮問題に神経を使っていたことがわかる。

一方百済との友好関係はずつとのちまで続いたが、六世紀に任那が滅び、七世紀の白村江ハクスキノエの大会戦で百済・日

本連合軍が唐・新羅の連合軍に大敗を喫して百済が滅亡し、弥生時代ヤヨイ以来の朝鮮權益に最後が来ることは、よく知られているとおりである。

七・十

應神天皇オウジンテンノウの崩御ホウギョと

神功皇后ジンクウコウゴウの實在性

この節では、應神天皇オウジンの崩御前後の有様と、神功皇后ジンクウコウゴウの實在性の問題や皇統の問題について、略説する。

第十五代 應神天皇の物語（3）

——崩御と皇統の問題——

▽應神天皇四十年（西暦三〇九年／四二九年）

〔皇太子の決定〕

正月——

次の天皇の候補として、大山守皇子オオヤマモリノミコト・大鷦鷯尊オオサザザキ・菟道ウジノ

稚郎子ワキイラツコという異母兄弟がいたが、天皇は面接試験のような問答をした結果、弟の菟道稚郎子を皇太子にし、兄——第四子だが皇后の子——の大鷦鷯尊をその補佐にするようにきめ、大山守皇子には山川林野を司る役目を与えた。

現在のように天皇の長男が継ぐという定めはなかったし、神武天皇ジンムのころのような末子相続のきまりもなかったから、派閥・閥閥争いがどの天皇の後継決定時にもあったようで、それが実におおらかに記されている。

ただし應神天皇の崩御後いろいろなことがあり、不満を持った大山守皇子は争って死に、菟道稚郎子と大鷦鷯尊は互いに遠慮しあってなかなか決まらず、そのうちに菟道稚郎子が自殺して、結局正室の生まれである大鷦鷯尊が即位して有名な仁徳天皇ニントクになる。

天皇の後継をめぐる争いの言い伝えである。

▽應神天皇四十一年（西暦三一〇年／四三〇年）

〔崩御〕

二月——

應神天皇が豊明宮トヨアカラノミヤで崩御された。

百十一歳だった筈だが『日本書紀』には百十歳と記されている。

もちろん、紀年の引き延ばしがあるので、実際の宝算（天皇の御寿命）は数十年は減るであろう。

崩年干支からの崩御実紀年の推定は、西暦三九四年とされている。もし降誕年は一二〇年加算が正しく、崩御は干支が正しいとすると宝算は七四ということになる。

また崩年が一二〇年加算でよいとすると、実際の御降誕は数十年あとということになる。

もし崩御年の干支推定が正しいとすると、『好太王碑』^{コウタイオウヒ}の碑文にある激戦は、仁徳天皇の御代ということになるが、『記紀』からは應神天皇の時代との印象をうける。

もつとも、晩年はどの天皇も皇太子に任せた可能性がつよいので、実質がどうだったかは、今となってはわからない。

それから、『好太王碑』はきわめて重要な史料だが、それは三韓征伐についてのほとんど唯一の外国史料だからであって、争いそのものは『好太王碑』の前後かなり長期にわたってなされたことを認識しなければならない。

この崩御の年、應神三十七年に江南に出発した使いが帰ってくるが、すでに應神天皇は亡く、縫工女^{キヌヌイヒメ}は間に合わなかった。そこで大鷦鷯尊に献じられた。その子孫は

いまの呉衣縫^{クレノキヌヌイ}や蚊屋衣縫^{カヤノキヌヌイ}である——として帰化人の子孫を記している。

◎驚くべき巨大な前方後円墳

以上が〈神功皇后〉の皇子、應神天皇の一生であるが、この天皇がとてつもなく強大な権力を手中にしていたことは、造営した母親〈神功皇后〉陵の大きさからも、また自身の御陵が次代の仁徳天皇陵と並んで世界一の巨大さを持つことから、よく分かる。

應神天皇陵は現在は誉田御廟山古墳^{コングゴヒョウヤマ}といわれて大阪府羽曳野市にある。写真を図7・4の（b）に示した。

またつぎの仁徳天皇陵は大仙陵古墳^{ダイセンリョウ}といわれて大阪府堺市にある。同図（c）である。

この二つはいずれも大和西部の山地を越えた場所にある。昔から河内、和泉と呼ばれてきた土地で、おおまかな地点を図5・1に示してある。

この二つの巨大前方後円墳の大きさを、日本以外の墳墓で最大とされるクフ王のピラミッドや秦^{シン}の始皇帝^{シヨウウテイ}の陵と比較して示したのが図7・5である。

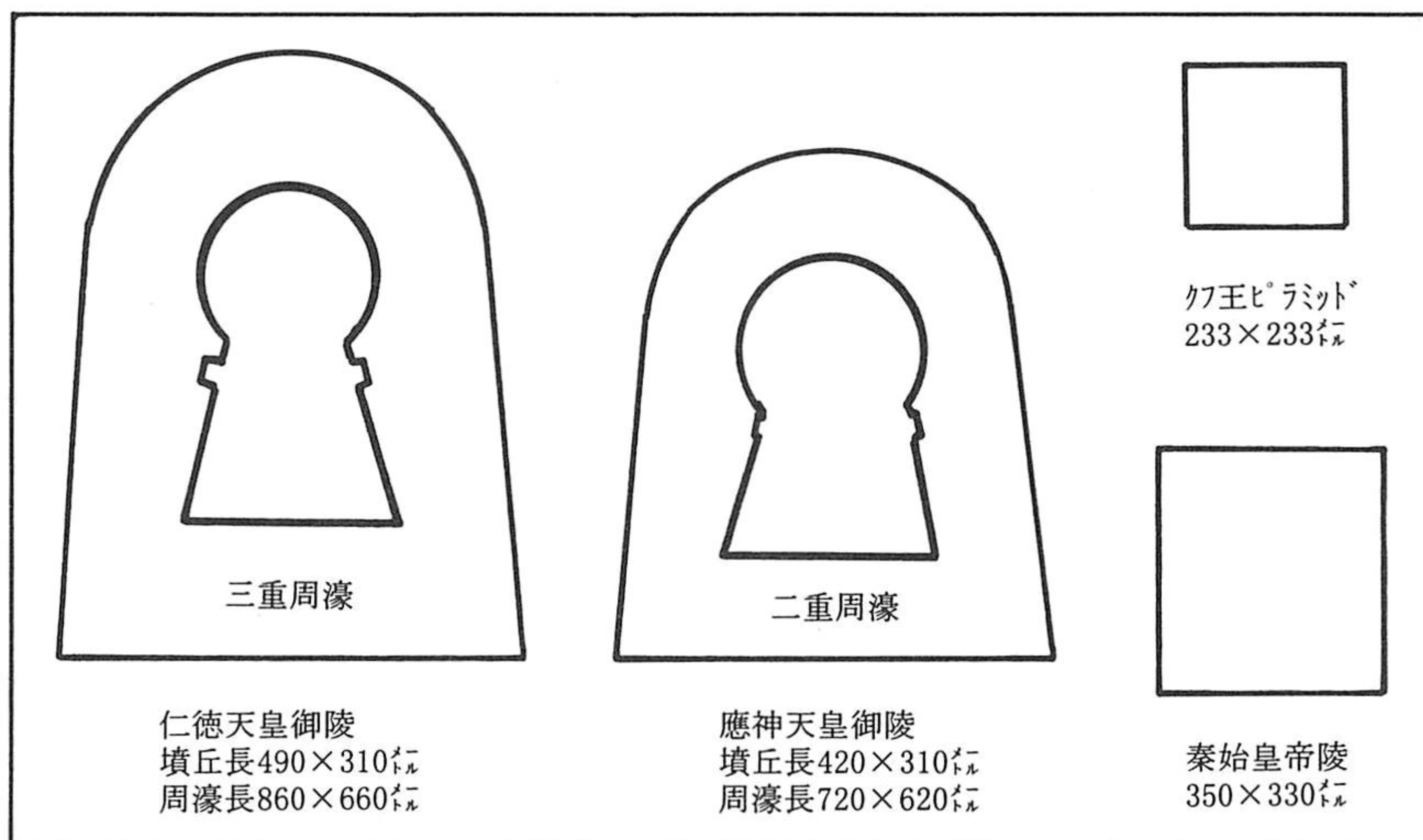


図7・5 應神・仁徳天皇御陵の大きさ（推定値）

仁徳天皇陵は、墳丘長が約四九〇メートル、周濠を含めると全長八六〇メートルもある。ほとんど一キロであり、面積は東京ドーム外周のほぼ十倍である。應神天皇陵もこれに次ぐ大きさを持っている。

高さこそピラミッドや始皇帝陵より下だし地下施設は不明だが、地表の面積では圧倒している。だんぜんたる世界一なのだ。

しかもこの天皇陵の周辺に群臣たちの墳墓群があり、それらを含めると、仁徳天皇陵の場合、幅五キロ、長さ十キロにも及ぶとされている。現在の皇居のほぼ十倍である。

古代の古墳群は荒廃と修復を繰り返しているので、造営時の姿がどうだったかについては、個々に発掘調査しなければいけないが、世界一の規模を持っていたことは間違いない。

ついでながら仁徳天皇を継いだ履中天皇^{リチユウ}の御陵もすぐそばにあり、墳丘長三七〇メートルに近く、仁徳・應神について世界第三位を誇っている。

これらの巨大前方後円墳の造営は、高度な技術が必要

たったことはもちろんだが、財政的にも動員力的にも絶大な力を持っていなければ不可能である。

〈神功皇后〉陵は應神天皇が、應神天皇陵は仁徳天皇が、それぞれ造営したものだし、仁徳天皇陵は生前から準備されていたというものの履中天皇が造営したものである。

だから次代の天皇の強力さを物語ってもいるのだが、それにしてもその威力が死後まで続いているなければ、このような巨大な墳墓をつくることは出来ないであろう。

この世界一の前方後円墳だけでも、神功↓應神↓仁徳↓履中↓・・・の力がいかに強大だったかが分かるし、万単位での朝鮮出兵が可能だったこともうなずける。

さらにその守護神の住吉神社スミヨシは、大阪・九州など国内各地だけではなく、朝鮮やシナにまでつくられたという伝承がある。

また、應神天皇オウジンを祀った八幡宮ハチマングウが数万というおびただしい数存在することも、この天皇のよういならざる威力を証明している。

◎虚構説・皇統断絶説への反論

應神・仁徳天皇の系列は、〈神功皇后〉の夫——つまり應神天皇の父親——である仲哀天皇チュウウアイの影が薄いために、いろいろな説があり、皇統がいったん断絶したのだという説さえある。

しかし、旧家に嫁いだ女性が才能豊かで、平凡な亭主の代わりに活躍してその旧家を隆盛に導く——といった話は、いまでもありふれている。

したがって『記紀』の物語は、べつだん不思議な事でもなんでもないであろう。

事績はどうぜん美化されているし、神話的な表現も多用されていて超人的ではあるが、〈神功皇后〉の物語は『記紀』にあるだけではない。

『風土記』にも『万葉集』にもたくさんあるし、朝廷に異論を持つ人たちが書いた『先代旧事本紀』センダイイクジホンギや『古語拾遺』コゴシユウイにもある。また住吉大社や籠神社コノなどの極秘古文書にも記されている。

籠神社の古文書（国宝『勘注系図』カンチュウ）などは、『記紀』に反する内容——饒速日命系重視の内容——をもっている。

るため、朝廷に見つかるのは拙いとして、じつに昭和五十一年になるまで公開されなかったのだが、それにすら「神功皇后」の名は記されているのだ。

『記紀』などの史書が編纂されはじめた奈良時代初期の朝廷はかなりの権限を持っていたが、まだまだ日本中に簡単にはいいなりにならない豪族がたくさんいたし、朝廷に従属しない独立心旺盛な神社もたくさんあった。

そのような時代にあつて、あらゆる史料に架空の女帝を書き入れよ——といった命令を下して、それを日本中が忠実に守るといったことがあり得るだろうか？

しかも『万葉集』の多くの歌など、じつに自然に地方に残る「神功皇后」伝説を詠み込んでいるのだ。

中央集権が徹底した江戸時代・大東亜戦争中・占領下でさえ、そんなことはできなかった。

古代の皇統にかんしては、第十代崇神^{スジン}、第十六代仁徳^{ニントク}、第二十六代継體^{ケイタイ}という王朝がその前と交替したのだ——という水野祐^{ユウ}らによる三王朝交替説があるが、これに反対する良心的な学者も多い。

たとえば南原次男は、この説の矛盾を水野祐に何度も質したが、ついに何の返事も無かったそうである。

著者の常識でも、皇統が完全に断絶して入れ替わったとは、とても考えられない。

遠縁の人物が入り婿の形で大和朝廷直系の妃を娶って後継になったという考え方ならまだ分らないでもないが、断絶して新しい王朝をきずいたのだとしたら、日本中が騒然としただろうから、その証拠が豪族の家伝や神社の古文書や歌集などにたくさん残っている筈だし、自身先祖を美化するとともに大和朝廷を歴史から消そうとしたであろう。

しかしそのような史料はなにも残されていない。

だから、『記紀』のとおり應神天皇自身も血のつながりが有り、「神功皇后」も実在して夫の天皇の代わりに大活躍した可能性が強いのではないだろうか。

このように考えてくると、最近の左翼系の学者による三つの主張、

(一) 「神功皇后」はまったくの虚構である。

(二) 任那はまったくの虚構である。

(三) 皇統の継続性はまったくの虚構である。

——は、牽強付会のように思える。

常識を捨ててイデオロギー的結論を先行させているように思えてならない。

とにかく以上が〈神功皇后〉を中心とした三代紀の概要である。

＊

さて、これで〈神功皇后〉とその前後の『日本書紀』の記事の説明を終わり、つぎに〈卑彌呼^{ヒミコ}〉との対応を考えることになるが、その前に、〈神功皇后〉や應神天皇の時代の実年代を推定する強力な根拠となる〈石上神宮^{イソノカミジングウ}〉の国宝「七支刀^{シチシトウ}」について、すこし詳しく触れておくことにしよう。

七・十一

《石上神宮》の七支刀

——《神功皇后》実紀年の推理——

◎《石上神宮》の場所と歴史

《大和》の地理をいくつかの方法で図示した図5・1、3、とくに図5・2をもらいたきたい。

大和川の支流のひとつに、笠置山地から流れ出る布留川がある。

奈良盆地の中央東寄りを流れているが、この布留川を遡ると、天理の市街を斜めによぎって山地に入るあたりの南岸に幽玄な地があり、そこに古式ゆかしい神社が鎮座している。

百済王が《神功皇后》に献上したと『日本書紀』に記されている「七枝刀」そのものが奇跡的に宝殿に伝世さ

れてきた《石上神宮》である。

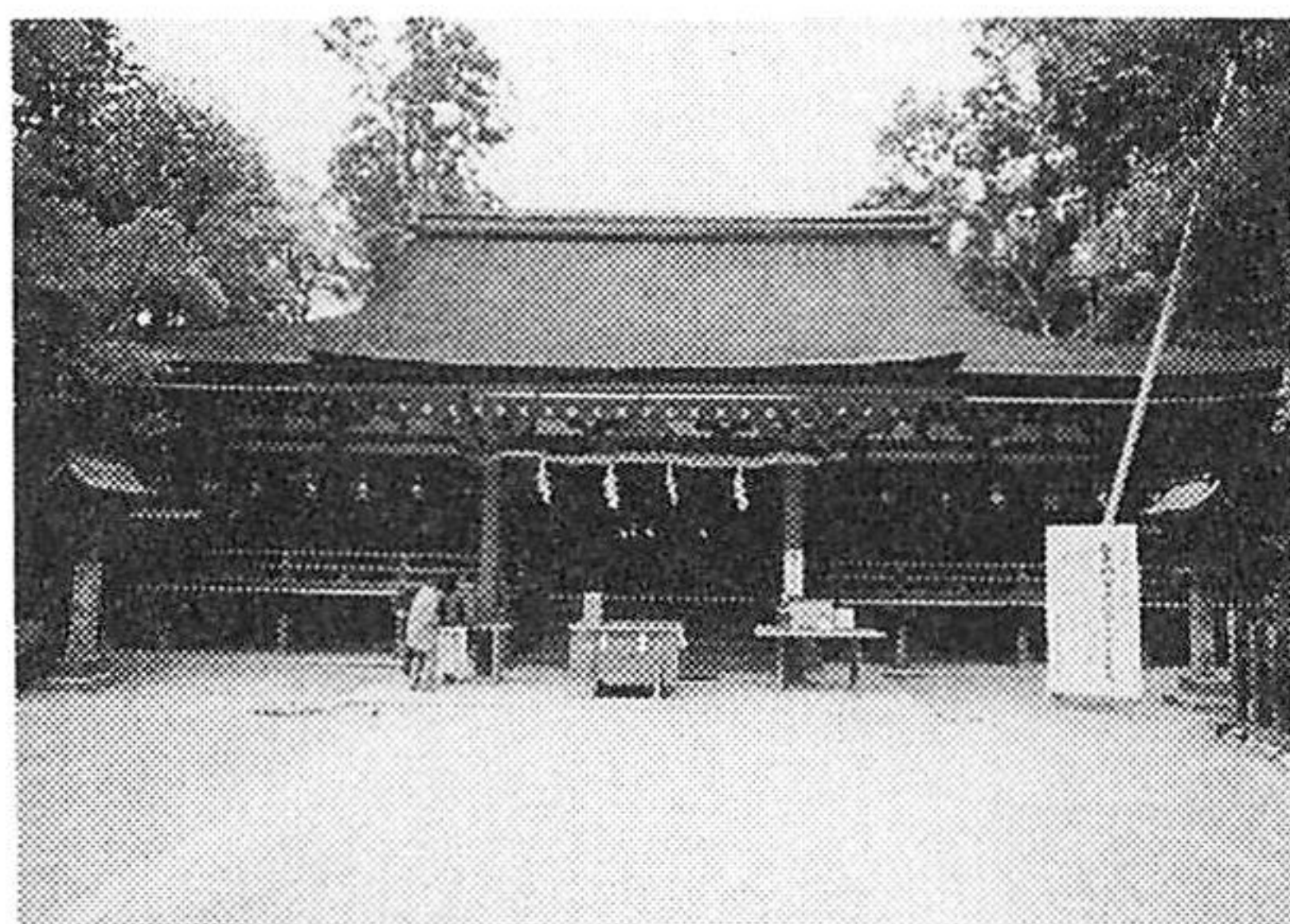
図7・6に境内と拝殿の写真を示すが、境内には神鶏が遊び、荘厳な拝殿はそれ自体が国宝であつて、神韻縹渺たる趣がある。

この神社は石上振神宮と呼ばれたり、石上布都御魂神社と呼ばれたり、また布留社と呼ばれたりしていたが、現在では《石上神宮》が正式名称になっている。

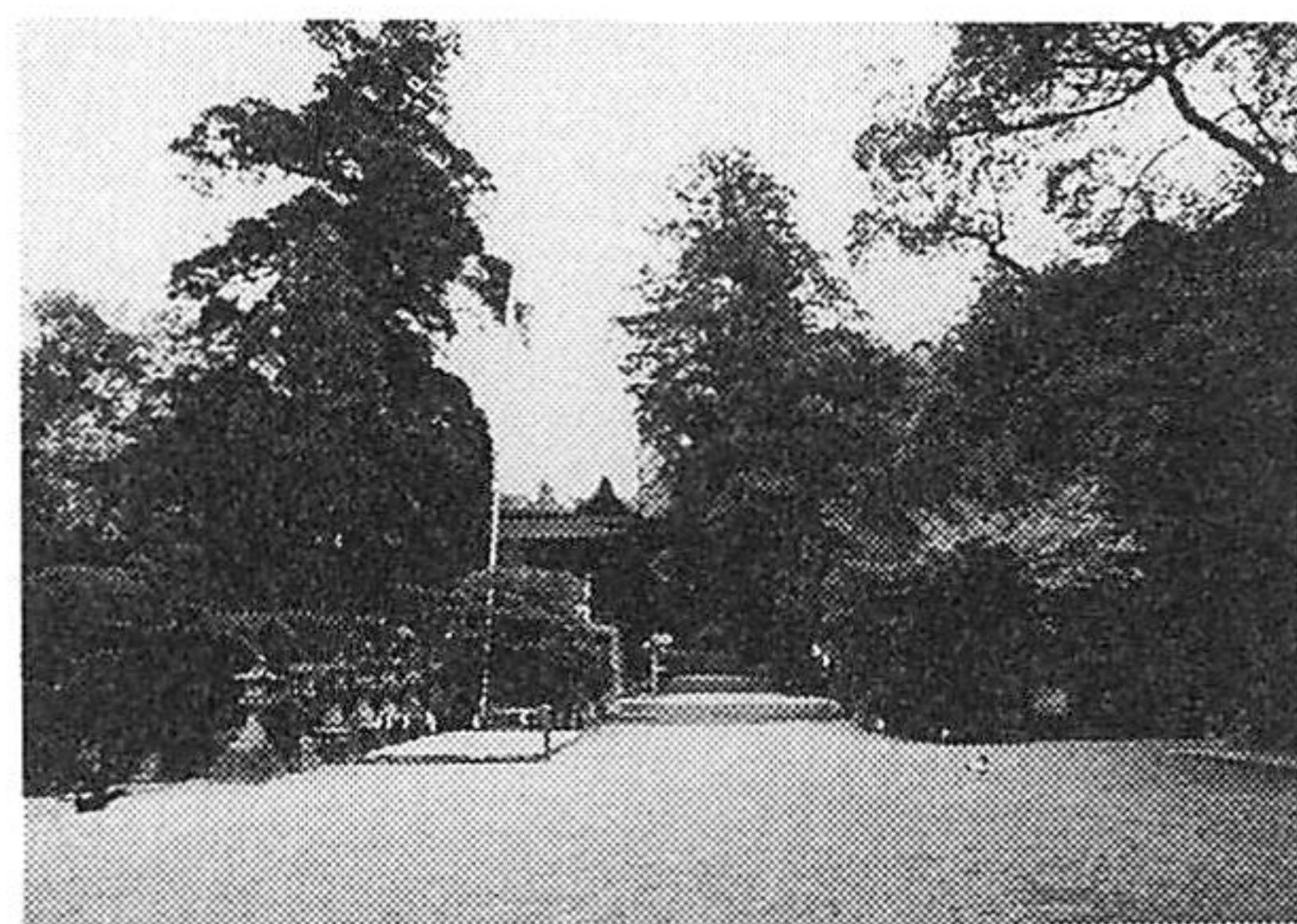
昔の神社の最高の格式である正一位官幣大社である。

石上も布留も神社名であるとともに鎮座地の名にもなっており、石上布留高庭が伝承されるその土地の名前だが、「布留」という奇妙な名は、後述するように「振る」から来ているらしい。

この《石上神宮》は大和朝廷の成立と密接に関係するといわれ、日本最古の神社の一つであり、図5・3でわかるように、大和朝廷発祥の地《三輪山》山麓に隣接し、山麓とは日本最古の公道「山の辺の道」で結ばれている。創建は第十代崇神天皇七年、天皇の勅令によるとされ、実紀年研究によれば三世紀半ばと推定されている。すなわち《卑彌呼》晩年の時代である。



(b) 拝殿



(a) 境内

図7・6 《石上神宮》の境内と拝殿
(拝殿のすぐ後部に秘宝が発掘された禁足の霊域がある)

この古さは、崇神天皇六年とされる《檜原神社》^{ヒハラ}（伊勢神宮の元となった神社）や《大和神社》^{オオヤマトジンジャ}、崇神天皇が初めて祭祀をなされた《大神神社》^{オオミワジンジャ}（信仰そのものはずっと古い）など《大和》^{ヤマト}の著名古社とほぼ同じであり、大和朝廷が正式に認めた神社としては名実ともに日本最古のひとつである。

《石上神宮》を含めたこの四社のうち檜原神社を除く三社までが最高格式の官幣大社である。

檜原神社も《大神神社》の摂社となっているから、官幣大社に準じている。

この《石上神宮》に勅命によって初めて祭神を奉祀したのは伊香色雄命^{イカガシコオ}だが、この命はかの《饒速日命》^{ニギハヤヒ}の子孫であり、したがってまた物部一族の祖の一人である。

このことから、《石上神宮》の祭祀は代々物部氏が預かることになり、物部一族の総氏神となったが、元来物部一族は軍事を担当しており、したがって《石上神宮》は自然に武器庫の役割を果たすようになったといわれている。

図7・7は、古代の《大和》の豪族の勢力範囲のおおまかな地図で、桜井市編『わがまち桜井』所載の岸俊男

作成の図を参考にしている。

西側の河内^{カワチ}方面から《大和》に入り込んだ《饒速日命》一族らと南東の吉野山地から入り込んだ大和朝廷との軋^{レキ}轢を連想するが、《饒速日命》の子孫を自負する物部一族の勢力範囲は、いまの天理市にある《石上神宮》の周辺であつたらしい。

《饒速日命》が河内に降臨してそこから《大和》に進出したことや、争いの末、神武天皇^{ジンム}に帰順したことは、すでに述べたとおりである。

さて次に、《石上神宮》の御祭神について記すことにするが、その由緒が記されているのは、『日本書紀』よりもむしろ『先代旧事本紀』^{センダイイクジホンキ}である。

この史書は、序文に聖徳太子^{ショウトクタイシ}や蘇我馬子^{ソガノウマコ}の撰と読める記述があるために、昔は『記紀』よりも古いと信じられてきたが、江戸時代からの研究によってそれは誤りであり、平安初期の成立であることが分かった。

しかし内容的には、『記紀』にはない古い伝承が含まれており、かつ物部一族の先祖についての記述に詳しいことから、物部氏の誰かが、『記紀』における物部関係の記述の少なさに不満をもち、『記紀』編纂の前からあつた家伝を元に著したのであろう——とされている。

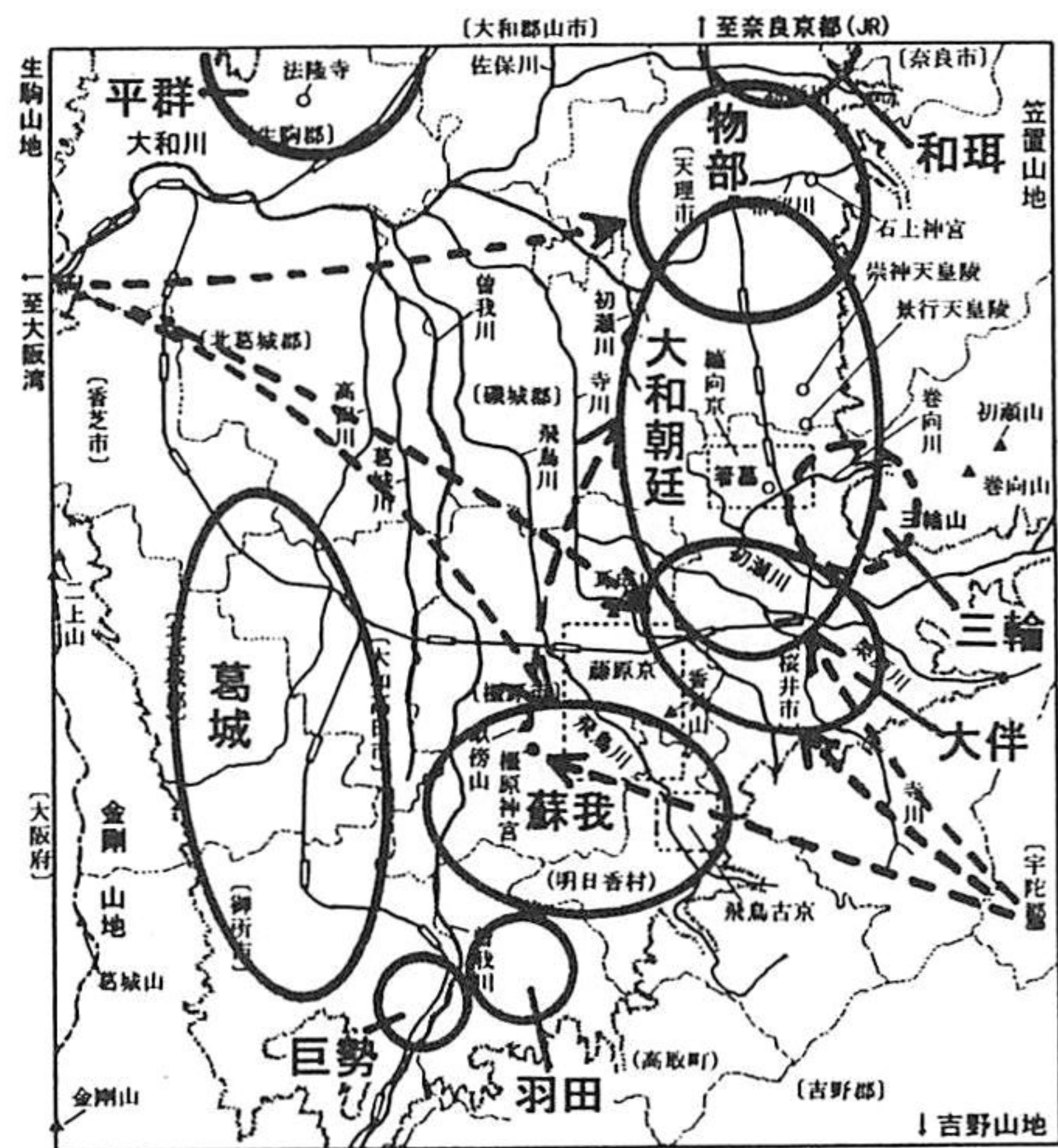


図7・7 大和地方有力氏族の勢力分布
(堀井孝昭『わがまち桜井』桜井市より作図)

もちろん朝廷への遠慮もあつたろうから、『記紀』を攻撃するようなところは無いが、《石上神宮》や丹後の籠^{コウ}神社など物部系の古い神社に残る言い伝えとも矛盾しないようである。

自分たち一族が軽視されたことへの不満を史書の形にした点では『古語拾遺』^{コゴシユウイ}と似た意思によって書かれたように考えられる。

◎《石上神宮》の祭神

さて、その『先代旧事本紀』と『日本書紀』、および神宮の解説書（引用文献参照）を元に、御祭神について記してみる。

三柱の主祭神はすべて剣と神宝の霊である。

主祭神

布都御魂大神
フツノミタマノオオカミ

布留御魂大神
フルノミタマノオオカミ

布都斯魂大神
フツシミタマノオオカミ

配祀神

宇摩志麻治命
ウマシマジノミコト

五十瓊敷命
イニシキノミコト

白河天皇
シラカワテンノウ

市川臣命
イチカワオミノミコト

ア 布都御魂大神

この神宮の最高位の主神である。

第六章で記したように、〈天照大神〉^{アマテラスオオミカミ}らが〈大己貴神〉^{オオナムチ}または〈大國主神〉^{オオクニヌシ}に国譲りを説得したとき、高天原から派遣された神が剣の切っ先にあぐらをかいて談判したのだが、その時の剣の名がフツノミタマとされている。『日本書紀』や『先代旧事本紀』では師^{フツノミタマ} 霊という文字をあてている。

その別字が布都御魂^{フツノミタマ}であり、その霊威を讃えて布都御魂大神と称しているのだ。

この霊剣はそののち高天原に帰ったが、やはり第六章にあるように、神武東征の際の危機を救うために〈天照大神〉^{ジンム}から神武天皇に与えられた。

神武天皇は即位後、これを〈饒速日命〉^{ニギハヤヒ}の御子である可美真手命^{ウマシマデ}に命じて宮中に奉斎させた。〈饒速日命〉一族が帰順したことへの一種の恩賞である。

第十代崇神天皇の六年に「三種の神器」^{サンシュノジンギ}のうちの「神鏡」と「神剣」が宮中から移されて檜原神社^{ヒハラ}（元伊勢）に奉斎されたが、その翌年の七年になつて勅命がおりて、こちらの剣・布都御魂も宮中外に祀ることになり、物部氏の先祖の一人の伊香色雄命^{イカガシコオ}が拝命して、石上布留高庭という地——つまり現在の《石上神宮》の地——に主神として奉祀した。

これが《石上神宮》の創建伝承である。

イ 布留御魂大神^{フルノミタマ}

神武東征の前に河内に降臨して《大和》の地に進出した《饒速日命》は、第六章で記したように高天原の天津^{アマツ}神から「十種の神宝」を授けられた。

二面の鏡、剣、四種の玉、邪悪なものを打ち払う三種の布帛からなる神宝である。

このとき天津神は、

「もし痛むところあれば、この十宝を、一二三

四五六七八九十と言って振るえ。ゆらゆらと

振るえ。かくなさば、死^{マカ}りし人も生き返らん」

——と教え諭した。

これは物部一族の祭祀の一つの形らしいが、「振るえ」は原文では「布留部」で、これが地名・川名・社名にある布留の語源である。

この「十種の神宝」が布留御魂^{フルノミタマ}で、《饒速日命》が帰順してから、その御子の可美眞手命が神武天皇に献上し、神武即位元年に天皇皇后の長寿祈願に用いられた。

これは鎮魂祭^{チンコンサイ}の始まりとされている。

この十宝は歴代天皇の宮中にあり、先の布都御魂の御前に奉祀されていたが、崇神天皇七年に、布都御魂と同

時に《石上神宮》に遷され、祭神となった。

なお本章トビラ裏の柿本人麻呂の歌にある「袖布留山」^{ソデフルヤマ}は、袖を振るの「振る」とこの「布留」をかけた有名な歌で、歌碑が建てられている。

ウ 布都斯魂大神^{フツシミタマ}

この大神も神剣の霊である。

素戔鳴尊^{スサノオ}が出雲国で八岐大蛇^{ヤマタノオロチ}を退治したときに使った

剣は十握剣^{トツカツルギ}といわれる大振りの剣だが、この剣は「三種の神器」の草薙^{クサナギノツルギ}剣を大蛇から取り出すのに役立った霊

剣でもあるので、その御霊威を讃えて、布都斯魂大神^{フツシミタマ}として奉祀され、祭神となった。

つまり、古代神話に出てくる神剣のうち、「三種の神器」となった草薙^{クサナギ}剣以外はすべてこの《石上神宮》に奉祀されたわけである。

武器庫としての役割をもつ神社にふさわしい祭神であろう。

エ 宇摩志麻治命^{ウマシマヂ}

《饒速日命》^{ニギハヤヒ}の御子の可美眞手命^{ウマシマデ}のことである。

オ 五十瓊敷命^{イニシキ}

第十一代垂仁天皇スイニンの皇子で、景行天皇ケイコウの兄にあたる。

武具の製造を担当して、剣一千口をつくつて《石上神宮》に納め、社宝を収める天神庫アメノホクラの管理を司った。

晩年には妹の大神姫命オホナカツヒメにその役職を譲ろうとしたが、姫命は女性の身で倉に登るのは困難だとして辞退し、物部氏に譲ったとされている。

この五十瓊敷命を主祭神とした神社が岐阜市にある。

力 白河天皇シラカワ

第七十二代、平安後期の天皇で、《石上神宮》を深く崇敬されて拝殿を寄進されたりしたので、祀られている。

キ 市川臣命イチカワオミ

第五代孝昭天皇コウショウの皇子の子孫で、春日臣カスガノオミの一族。第十

一代垂仁天皇スイニンの時代から《石上神宮》に仕えた。その子孫は布留宿禰フルノスクネと称し、物部氏を補佐して長く祭祀をつとめた。

以上の祭神でもわかるように、宮中に関係する宝剣の類はほとんどこの神宮の神庫に奉祀されてきたし、また実際に使用するための一千口もの剣も神庫に保管されてきた。また《饒速日命》の「十種の神宝」のように武具

以外の宝物も保管されてきた。

帰化王子の天日槍アメノヒボコが運んできた朝鮮の神宝もここで保管したと伝えられている。

そういうことなので、当然のことながら、《神功皇后》の五十二年に百濟国クダラの王から貢献された有名な「七枝刀」ナナサヤノタチや「七子鏡」ナナコノカガミもここで保管したであろう。

「七子鏡」とはたぶん、周囲に小さな六つの鏡が付属した特殊な形状の鏡であろうが、これは残念ながら不明となっている。

しかし「七枝刀」ナナサヤノタチは奇跡的に伝世されて、現存している。

神宮では「六叉鉾」ロクサノホコと呼び伝えてきたが、刀に刻まれた銘文には、「七支刀」シチシトウとあるので、現在ではこれが正式の名称となっている。

◎《石上神宮》の苦難と神宝発掘

さて次が、この神宮の苦難の歴史である。

最初の苦難は八世紀末の桓武天皇カンムの時代で、平城京から長岡京に遷都したとき、ご神体がその新都に召し上げ

られてしまった。

都から遠くなった《石上神宮》に武器を保管させるのは危険である——という朝廷の考えによる措置だったらしい。

しかし天皇の身に崇^{タタリ}りが生じたので、すぐに返還された、といわれている。

おそらく物部系有力者の尽力があつたのであろう。

右は《石上神宮》ならではの例外的な事件であるが、日本の社寺はどこでも、乱世に土地や神宝を失うという苦難に遭遇している。

たとえば、十二世紀の源平の争い、十五世紀の応仁^{オウニン}の乱にはじまる戦国時代、十六世紀の信長勢の《大和》侵略、豊臣・徳川時代になされた検地^{ケンチ}による領地没収、そして大東亜戦争による空襲被害と敗戦による鎮守^{チンジュ}の森の喪失・・・などである。

この《石上神宮》も例外ではなく、とくに永禄^{エイロク}十一年に信長に援助された尾張勢が神宮境内に乱入して、拝殿や神庫を打ち壊し、中のものを強奪したため、多くの神宝や古文書が失われた。

また豊臣秀長の命令によって社領も何十分の一かに減

らされ、すっかり衰微してしまった。

この時代には、勅命がなければ開けることを許されない有名な東大寺の正倉院ですら、織田勢などによって多くが失われたといわれているので、やむを得ないことであつた。

おそらく、このような被害を少しでも避けようとした関係者の苦心の策が、禁足^{キンソクチ}地だったのであろう。

いつのころからか、拝殿の背後に絶対に人の入ることを許さない禁足地ができ、そこに霊剣・布都御魂^{フツノミタマ}大神などの御祭神や神宝が埋斎されているという話が密かに口伝されてきたのだ。

その真偽は長く不明だったが、明治になって古くからの神社が重んじられるようになり、第一・一節で記した歴史学者の菅政友^{カンサトモ}が《石上神宮》の大宮司^{ダイグウジ}になったとき、官許を得て発掘（明治七年）したところ、口伝どおり、多くの神宝が出土した。

そしてそのさい、御祭神布都御魂^{フツノミタマ}とおぼしき霊剣が、鋭端を東に向けて、地中に鎮座していたのが見つかったのである。

元来この神宮には拝殿はあっても本殿は無く、禁足地

に向かって参拝する形をとっていた。そして神庫は禁足地の外側にあったのだが、菅政友の後任者はこれら出土品を奉祀するために、禁足地内に本殿をつくった。

また後に、神庫は禁足地内に遷され、これとは別に耐火施設の宝物収蔵庫を建造して、現在は社宝はここに奉安されている。

さて、菅政友が発掘した霊剣以外の出土社宝だが、それは次のようなものである。

硬玉勾玉十一箇・碧玉管玉二九三箇・琴柱形石製品・弧状管玉・硬玉棗玉・角形管玉・環頭大刀柄頭・銅鏃・金銅垂飾品・金銅空玉・草花文鏡・萩菊双雀鏡・鏡形銅製品二面・瑞花文八稜鏡・草花文五稜鏡

これらの多くは古墳時代前期の製造と思われる、ひじょうに古いものである。

〈饒速日命^{ニギハヤヒ}〉が天の神から授けられた「十種の神宝」を連想させる玉や鏡が多いことに注意されたい。

以上の出土品はすべて、国の重要文化財に指定されている。ただし次の品は、鉄製品であるため錆がひどく、指定はない。

籠手残欠

大刀

いくつかに折れた鉾状物や槍状物

霊剣・布都御魂のほか、明治十一年になって同じ禁足地から、神話にある十握剣かもしれない宝刀が出土したといわれる。

ここで大刀と記されているもの、図7・8(a)がそれであろう。

(菅政友が布都御魂^{フツノミタマ}として記録した霊剣はご神体そのものなので、写真等には撮られていないが、発掘時の手書き図が残されていて、神道大系で見ることができる)

出土品のほとんどが重要文化財だが、もちろん出土品以外にも国宝や重文などがある。

それを一覧にしておく。

拝殿(国宝)

摂社出雲建雄神社拝殿(国宝)

〔出雲建雄は三種の神器・草薙剣の荒魂〕

七支刀(国宝)

楼門(重要文化財)

鉄盾（重要文化財）

色々威腹巻（重要文化財）

境内二十四万平方メートル（奈良県天然記念物）

鏡池とワカタ（魚）（奈良県天然記念物）

太刀・小狐丸（奈良県指定文化財）

厳甕（奈良県指定文化財）

繪額二面（奈良県指定有形民族文化財）

要するに神社全体が国宝のような社なのだが、このなかでも史料としてとくに重要とされるのが、「七支刀」である。

◎《石上神宮》の奇跡の至宝「七支刀」

さて、問題の「七支刀」である。

これは禁足地に埋められていたのではなく、高句麗^{コウクリ}からの献上品かもしれない鉄盾など他のいくつかの重要文化財とともに神庫に保管されて伝世されたもので、尾張勢の乱入によって神庫自体が破壊されたときにも、略奪を免れて、現在に至った。

これは奇跡的なことであるが、いくつかの最重要な社宝とともに、山中に隠すなどして難を逃れたのかもしれない。

また菅政友の論文によれば、尾張勢の略奪物のいくつかは翌年に返却されたとあるので、「七支刀」も略奪されたのちに戻された可能性がある。

神社関係者や朝廷などによる必死の働きかけがあったのであろうが、何と何が戻ったのか、戻らなかったのは何か、など、詳細は菅も記していない。

「七支刀」以外の多くの社宝・古文書などが行方不明になったのは確かであるが・・・。

「七支刀」の写真を図7・8（b）に示す。

じつに珍しい形状の刀で、たしかに六つの枝と先端とで合わせて「七支」である。

鍛鉄製で全長が約七十五センチある。

錆におおわれてはいるが、校倉造^{アセクラ}りの神庫の環境が良好だったであろう、いまだ原形を保っており、そこに金象嵌^{キンゾウガン}で記された六十余文字の銘文があって判読可能である。

百済王^{クダラ}がきざんだこの銘文は、次のようなものである。

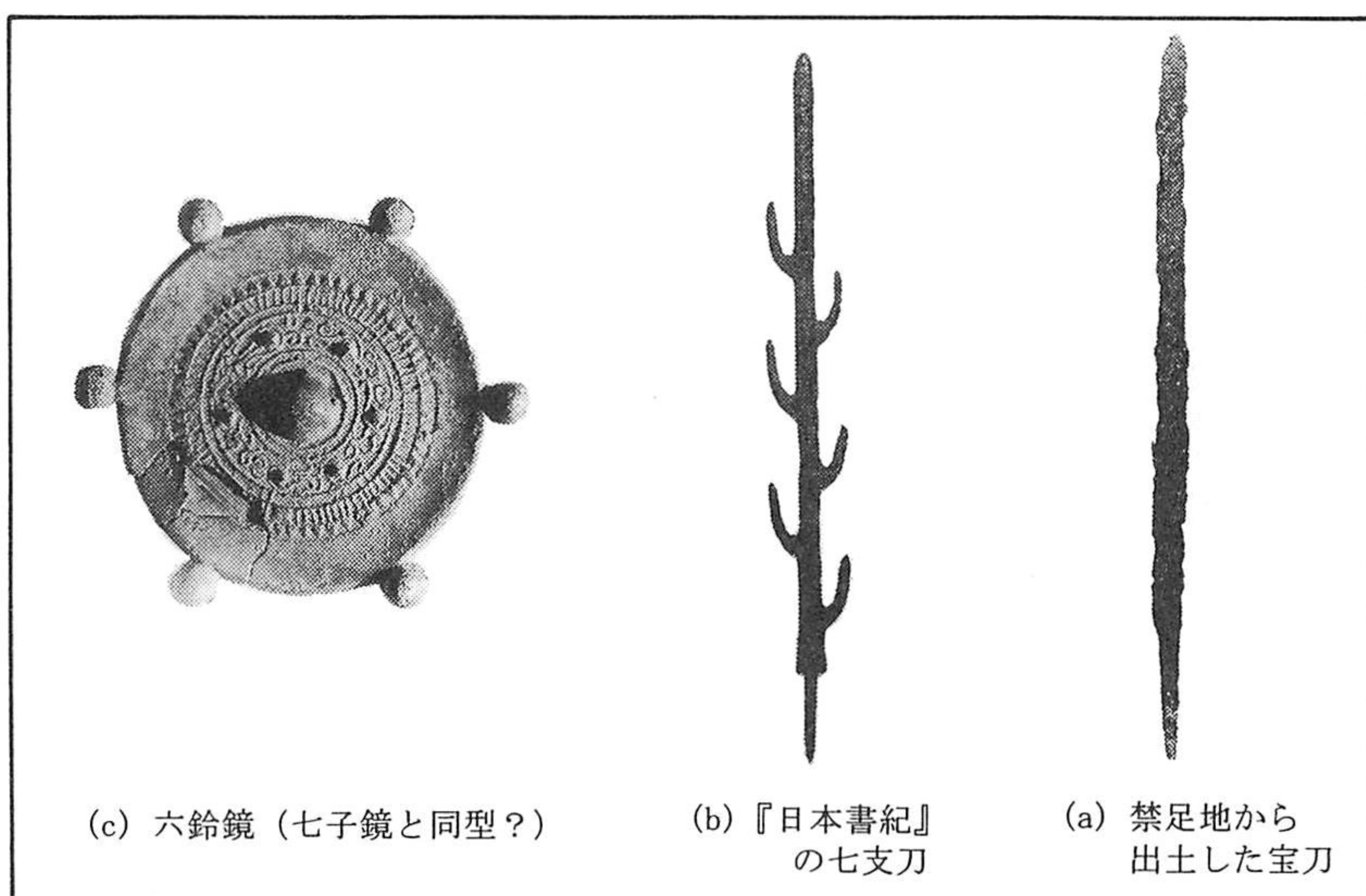


図7・8 《石上神宮》の神宝

((a) (b)は石上神宮蔵／冊子『石上神宮』より、
(c)は神宮徴古館蔵／『神宮の博物館』より)

（表面）泰和四年五月十六日丙午正陽 造百練

鐵 七支刀 以辟百兵宜供侯王

□□□□作

（□は判読不能）

（裏面）先世以來未有此刀 百濟王 世子奇生

聖音故 爲倭王旨造 傳示後世

推定されるおおまかな意味を、八木莊司の訳で記すと、

（表面）泰和四年（西紀三六九年）の五月十六

日丙午ヒノエウマの日の日中、百練した鉄で七

支刀を造る。もって百兵（多くの敵）

のわざわいを避くべく、侯王コウオウ（帝また

は諸侯）に供するにふさわしい靈刀で

ある。

□□□□が作る。

（裏面）古来いまだ、このような刀はなく、百

濟王と世子セシ（太子）の寄生キセイ（『日本書紀』

の貴須クイス、『三國史記』の仇首）が、聖な

るお言葉ゆえに、倭王のおんために造

る。後世に伝示されたい。

——といったことになる。

これが特A級の史料である最大の理由は、冒頭に「泰和四年」という紀年が記されていることである。

朝鮮半島の各国はずっとシナ王朝の年号を使用していたので、これは東晋トウシンの年号である「太和タイワ」の音を仮借したものとみるのが通説である。

そしてこれへの反対意見は少ない。

だとすると、この「七支刀」は、

「ミマナニホンフ任那日本府ができた西暦三六九年に製作された」

——ことになる。

第七・七節に記したように、日本に献上されたのが、ジングウコウゴウ〈神功皇后〉五十二年で、これは西暦表示で二五二年だが、一二〇年加算をすると三七二年になる。

製作年の二・三年のちに日本に届いたとすれば、この刀の銘文と『日本書紀』の記述とはピッタリと一致する。

おどろくべきことだが、この一致によって、干支二回りの一二〇年加算が信憑性を持つといえるのである。

そしてそのことは、〈神功皇后〉摂政から應神天皇への

交替の時期が、どうやら三七〇年代ではないか——という実紀年推理にも結びつくのである。

西暦三六九年というのは、一二〇年加算した『日本書紀』の事項を見ると、日本軍が百済クダラと協力して新羅シラギを押さえ、弁韓ベンカンの七国を帰順させて任那ミマナを拡大し、済州島サイシュウトウを支配して百済に譲渡し、そして任那日本府を元弁韓の地に設立した年である。

したがって、日本との修好を願う百済王が、七国帰順を祝ってこのような七つの枝をもつ特殊な刀に銘文をきざんで朝献してくる必然性は、きわめて高い。

この時代の百済王は近肖古王といわれ、『三国史記』によると、王と太子の近仇首王（銘文中の奇生）とが高句麗コウクリと激しく戦っていること、および新羅と何とか和解して国境を確定しようとしていること、などがわかる。

したがって、高句麗対策の一環としても、元来友邦だった日本に宝物を贈ってさらに味方につけようとしていたことは、十二分に考えられる。

また、『日本書紀』には明示されていないが、対新羅戦だけでなく対高句麗戦にも日本の大軍が参加していたことは、『好太王碑』コウタイオウヒから確実である。

このようなことから、この国宝「七支刀」^{シチシトウ}は、〈神功皇后〉^{オウジン}から應神天皇の前記の実年代を推理する、日本で最古の、かつきわめて有力な史料なのである。

なにしろ、いまから千六百三十年も前の古墳時代の伝承を記した『日本書紀』にある外国からの献上品そのものが、遺跡からの出土ではなく、神社宝殿の伝世品として、いまに伝わっているのだ。

まさに奇跡である！

なおもう一つの宝物である「七子鏡」^{ナナコノカガミ}は紛失してしまっているが、それを連想させるような古鏡があるので、図7・8(c)に示しておいた。

伊勢神宮の徴古館に収蔵されている六鈴鏡で、古墳時代——つまり〈神功皇后〉のころ——に作られたと考えられるものである。

百済から届いた「七子鏡」も——そのものズバリではないにしても——これに似た形状ではなかったか、と想像される。

（かえすがえすも、織田や尾張勢の略奪が残念である。源平や南北朝時代の略奪だったかもしれないが・・・）

七・十二

『魏志倭人伝』との奇妙な一致

◎数多い〈卑彌呼〉との暗合

神功皇后紀ジンクウコウゴウキと『魏志倭人伝』ギシワジンデンの対応は、じつに多くある。多すぎるくらいだといえる。

それを以下に列举してみよう。
簡単に結論が出るわけではないが、

「〈卑彌呼〉」 〓 〈神功皇后〉説

——は、

「ヤマトイコク邪馬台国」九州説

とも結びつくし、また、

「ヤマトイコク邪馬台国」大和説

とも結びつく。

〈神功皇后〉や應神天皇オウジンが九州を本拠とする豪族の出だったと仮定すれば前者になるし、『記紀』の記述にそって
いるとすれば後者である。
ここでは一応、前者もありうるとして箇条書きにしてみる。

〈1〉暦年の一致

『魏志倭人伝』で年代入りで記されているのは西暦換算で二三〇年くらいから二五〇年くらいの事件だが、この
〈神功皇后〉紀の後半の年代も、修正をまったくしないで西暦に換算すると、同様になる。

また〈卑彌呼〉の活躍はその前、つまり三世紀初頭からあつた筈なので、それは〈神功皇后〉紀の前半とほぼ一致する。

すなわち、〈神功皇后〉が朝鮮へ遠征するのは、『記紀』のと通りの紀年を一二〇年加算しないで西暦に直すと二〇〇年である。

〈2〉『魏志倭人伝』の引用

神功皇后紀には、『魏志倭人伝』にある魏キとの使者交換の引用が三箇所にも出ていて、西暦換算の年も完全に一致している。

また、〈臺ト與ヨ〉に對比したと思われる西暦二六六年の『起居注キキヨチユウ』の引用まである。

〈3〉国の乱れ

『魏志倭人伝』には倭国が乱れたとき、男王が立ったが治まらず、女王を擁立してやっと平穩になった——とある。

これを『日本書紀』に見つけることは容易である。

すなわち、少し前の景行天皇紀ケイコウでは、国々が乱れて困り、そこで日本武尊ヤマトタケルが九州や東国に遠征して諸国を平定したが、途中で病没したことになっており、国の乱れに苦勞した話が多い。

景行天皇は第十二代だが、次の第十三代の成務天皇セイムや〈神功皇后〉の夫の第十四代仲哀天皇チュウアイは、『記紀』ではじつに影が薄く、ほとんど無視されている。

したがって男王では駄目で女王を共立した——との『魏志倭人伝』の記述に一致するといえる。

〈4〉名前の一致

〈神功皇后〉の諡号オクリナでかつ諱イミナと思われる氣長足姫尊オキナガタラシヒメミコトの末尾の「ヒメミコト」は〈卑彌呼ヒミコ〉そのものであり、名前の点でも一致している。

〈5〉夫が無く男弟が補佐している事

夫がないという『魏志倭人伝』の記述に合わせるのは簡単で、夫の仲哀天皇は早世し、その後で〈神功皇后〉の活躍が始まるのだから、活躍期間のほとんどにおいて夫は無いことになる。

また大臣の武内宿禰タケウチノスクネが夫がわりのような感じで終始補佐しているが、これは「男弟が補佐している」——という『魏志倭人伝』の記述に通じる。

また〈卑彌呼〉の身の回りの世話はただ一人の男がしているという話も、武内宿禰に比定することが可能である。

さらに、女王の言葉を外に伝える役割をしている男の件は、仲哀天皇九年1の審神者サニウツが暗示的である。

〈6〉靈力の一致

『魏志倭人伝』の〈卑彌呼〉は鬼道をよくするとあるが、〈神功皇后〉も盛んに靈力を發揮し、神託をうけて政治を決定するとともに、数々の奇跡を起こしている。

まさに鬼道である。

〈7〉北九州の地名の一致

『魏志倭人伝』に出てくる末廬^{マツロ}国、伊都^{イト}国、奴^ナ国が、〈神功皇后〉紀——および仲哀天皇紀——にも、次々に出てくる。

また仲哀天皇の在位時に皇宮を九州と至近距離にある山口県にかまえ、そのあと〈神功皇后〉のみの時代に拠点を北九州に移している点、また『邪馬台国』の候補地の一つである九州の山門^{ヤマト}が神功皇后紀に出てくる点も、なにやら暗示的である。

〈8〉東征伝説

『邪馬台国』が東征して大和に移ったという神武^{ジンム}天皇紀と結びつけられている説に対応する移動が、〈神功皇后〉紀にもちゃんと見られ、北九州に拠点を持った〈神功皇

后〉が戦いながら近畿に移動する。

さらに面白いのは、瀬戸内海からまともに大阪湾に向かったのではうまくいかず、紀州方面に迂回して上陸して成功する話があることで、これもまた神武天皇紀の東征神話と酷似している。

したがって『邪馬台国』九州説ともうまく結びついている。

〈9〉皆既日食の記録

「〈卑彌呼〉Ⅱ〈天照大神〉説」のひとつの根拠は西暦二四八年の皆既日食だったが、〈神功皇后〉紀にも皆既日食を思わせる記述がある。

昼も夜のように暗くなったという事件である。

〈10〉狗奴国と熊襲の対応

『魏志倭人伝』では〈卑彌呼^{ヒミコ}〉は狗奴^{クナ}国との闘いに苦戦するわけだが、神功皇后紀や仲哀天皇紀では熊襲^{クマシ}征伐が大きな難問題となっている。

狗奴国が熊襲だったとすると、これもまた記述の一致だといえる。

まだまだ対応は有ると思うが、このくらいにしておく。
以上の照合をまともに考えると、〈神功皇后〉は〈卑彌呼〉そのものではないか——と考えられる。

なにしろ『記紀』の編者自身が

「〈卑彌呼〉Ⅱ 〈神功皇后〉説」

——をとっているらしいのだから……！

◎井沢元彦のユニークな説

なお井沢元彦は、「《邪馬台国》九州説」を補強するものとして、宇佐八幡宮ウサハチマンガウの特異性を記している。

宇佐八幡宮は前記したように應神天皇を祀る八幡宮の総本宮で、九州北部にあるひじょうに古い神社である。

そこには

〈神功皇后〉

應神天皇

日賣大神ヒメオオミカミ（〈天照大神〉アマテラスオオミカミの姪たち）

——の三柱の神が祀られているが、應神天皇を主神とする神社でありながら一番上座にあるのが日賣大神なの

だそうだ。

そしてこの宇佐八幡宮の礼拝作法が出雲大社とおなじ独特なもので「二礼・四拍手・一拝」なのだという。

ふつうの神社は「二礼・二拍手・一拝」または「二拍手・一礼・二拍手」だから、たしかに独特である。

それから、古くから皇室で別格の扱いを受けてきた《伊勢神宮》や出雲大社と同じく別格であり、歴史もきわめて古く、應神天皇の御心霊が六世紀に宇佐の地に御示顕になったといわれている。

こういうことから井沢元彦は、日賣大神はじつは〈天照大神〉そのものであり、東征して《大和》の地に本拠を遷したのは〈天照大神〉に関係の深い〈神功皇后〉の系列の豪族で、彼らがその前にいた古い大和一族に取って代わったのだ——としている。

そして、〈天照大神〉を祀った《伊勢神宮》があるのになぜ宇佐にも祀るのか——という疑問に対しては、田舎から都会に出て成功した人が、現住所に仏壇を飾り、また実家にも飾ってあるのと同じようなことだ、と答えている。

じつにユニークな仮説で、「《邪馬台国》九州説」をよ

く説明しているようにもみえる。

＊

〈神功皇后〉と〈卑彌呼〉がこれだけの一致点を持つて
いるにもかかわらず「〈卑彌呼〉」 〳 〳 〈神功皇后〉説」が主
流になっていないのは、紀年の違いがあるからである。

たしかに『記紀』の皇紀を基準にすれば紀年も一致す
るが、それは明治以来の学問的研究によつて皇紀の引き
延ばしが確実視されている以上、そのまま信じるのは科
学的ではない。

そこで次節で、紀年問題を中心にした検討を加えてみ
よう。

七・十三

〈卑彌呼〉Ⅱ 〈神功皇后〉説 の確からしさ

◎ 〈卑彌呼〉と 〈神功皇后〉

前節の〈1〉と〈10〉項は、

「〈卑彌呼〉Ⅱ 〈神功皇后〉説」

—— にとって魅力的な暗合であるが、そうかといって、これを鵜呑みにするわけにはいかない。

もともと 〈神功皇后〉^{ジングウコウゴウ} の大きな事績である三韓征伐や任那日本府設置は、魏^キに朝貢した 〈卑彌呼〉^{ヒミコ} とは正反対だし、実際上の年代も干支二回りの違いを考えると、ま

ったく時代が異なる。

では、〈卑彌呼〉の話と後の朝鮮との抗争の話とを混ぜて 〈神功皇后〉 伝説を創作したのだろうか？

つまり 〈神功皇后〉 は架空の存在なのだろうか？

このように主張する学者も一部にいるけれども、それにしては 〈神功皇后〉 の事績についての史書や詩歌や神社の秘文や各地の伝承が多すぎる。

やはり実在した女王をモデルにして、史実を神秘化したのであろう。

神功皇后紀と應神天皇紀^{オウジン}とで年代関係が入り組んでいて矛盾があるのは、意図的に創作したからではなく、つぎの理由によるものであろう。

一 神武天皇即位を紀元前六六〇年の革命の年に移動したものの、繼體天皇以後はほぼ完全に『記紀』の紀年と実紀年が一致するようにしたので、神武と繼體の間で調整しなければならず、そのために紀年全体を移動しつつ、一天皇の在位期間を伸ばさなければならなかった。

二 〈卑彌呼〉と 〈臺與〉^{トヨ} を 〈神功皇后〉 に照応させるために、年代を調整しなければならなかった。

三 西暦三六九年ごろや四〇〇年ごろの日本府設置や朝鮮出兵の史実と神話的な三韓征伐を結合しなければならなかった。

四『百濟記』など百濟の史書との対応もとらねばならなかった。

実紀年の推理については節のおわりに再度記すことにして、ここで第七代孝靈天皇コウレイ以後の御陵の大きさについて記しておく。

ただどの御陵がどの天皇のものか——については、明治初めに強引に決めてしまった面もあるので、研究者によつて様々な意見があり、百パーセント正しいとはいえないことを注意しておく。

つぎの数字は現存する墳丘長のみで、周囲の濠や堤防は含まれていない。

それらを含めると、もつとずっと大きくなるし、いまは消えていても発掘によつて大きな周濠が推理されているものもある。

幕末の大修理によつて墳丘形自体が違つてきたものもあるらしい。

第二章にある〈卑彌呼〉候補の一人〈倭迹迹日百襲姫命〉ヤマトトトヒモソヒメミコトの父親とされる孝靈天皇の御陵は山形で、それ以後はす

べて前方後円墳だが、形状がはっきりしかつ巨大になるのは〈百襲姫命〉の御墓以後である。

また孝靈天皇以前になると、さらにあいまいになる。

第七代・孝靈天皇陵コウレイ 一〇〇メートル

(これ以後前方後円墳)

第八代・孝元天皇陵コウゲン 一四〇メートル

第九代・開化天皇陵カイカ 一〇〇メートル

(これ以後超巨大となる)

倭迹迹日百襲姫命陵ヤマトトトヒモソヒメミコト 二八〇メートル

第十代・崇神天皇陵スジン 二四二メートル

第十一代・垂仁天皇陵スイニン 二二七メートル

第十二代・景行天皇陵ケイコウ 三一〇メートル

同皇子・日本武尊陵ヤマトタケル 一九〇メートル

第十三代・成務天皇陵セイム 二二〇メートル

第十四代・仲哀天皇陵チュウアイ 二三八メートル

同皇后・神功皇后陵ジンクウコウゴウ 二七六メートル

第十五代・應神天皇陵オウジン 四二〇メートル

第十六代・仁徳天皇陵ニントク 四八六メートル

第十七代・履中天皇陵リチニウ 三六五メートル

(皇族の墓の名称にはいろいろな定義があるが、

ここではすべて陵という言葉を使用した)

表中国日本武尊は崩御後白鳥になって飛び遷ったので合計四基もの御陵が知られているが、ここでは羽曳野市ハビキノにある最大の御陵の寸法を採用した。

この表を見ると、〈倭迹迹日百襲姫命〉からとつぜん二百メートルをこす大規模な前方後円墳となり、日本武尊は早世したので別としても、巨大な墳墓がつづき、そして應神・仁徳・履中にいたってとてつもない規模になったことが分かる。

この御陵の大きさの変移は、大和朝廷の進展を考えるさいにとっても参考になる。

ここで着目している〈神功皇后〉の御陵は、夫の仲哀天皇や先代の成務天皇の御陵よりずっと大きいことに注意されたい。

◎〈神功皇后〉実紀年の多面的推理

〈神功皇后〉と〈卑彌呼〉の関係を論ずるとき、また〈神功皇后〉の实在性や朝鮮進出の史実性を検討するとき、その実紀年の推定が大きな問題となる。

そこで、いくつかの面からの実紀年推理について、記しておく。

以下の紀年数字はすべて西暦である。

〔1〕崩年干支による推定

干支の記述によって実崩年を推定すると、

成務天皇 三五五年

仲哀天皇 三六二年

神功皇后 三七〇年代？

應神天皇 三九四年

仁徳天皇 四二七年

——となる。

〈神功皇后〉の崩年干支は伝えられていないが、仲哀と應神の間にあることは確かなので、その活躍期間（摂政在位期間）は「三六〇〜八〇年ごろ」と推定できる。

〔2〕一二〇年加算による推定

『日本書紀』にある降誕〜即位〜崩御の三つの紀年を一二〇年加算してみると、

成務天皇 二〇四～二五一～三一〇年
 仲哀天皇 二二九～三一二～三二〇年
 神功皇后 二九〇～三二一～三八九年
 應神天皇 三二〇～三九〇～四三〇年
 仁徳天皇 三七七～四三三～五一九年
 ————のようになる。

つぎに、神功皇后紀と仁徳天皇紀にある朝鮮半島関係の記事の紀年を、一二〇年加算で並べておく。

神功皇后紀——

三二〇、三二五、三六六、三六七、三六九、
 三七〇、三七一、三七二、三七五、三七六、
 三八二、三八四、三八五

應神天皇紀——

三九二、三九六、三九七、四〇三、四〇四、
 四〇五、四〇九、四一四、四一七、四二〇、
 四二六、四二八

仁徳天皇紀——

四三〇、四四三、四四四、四四九、四七三、
 四八五、四九〇

神功皇后紀の後半については一二〇年加算がかなり合うとの意見が多いので、これらの数字から、活躍期間は「三二〇～三八〇年ごろ」と推定できる。

〔3〕『三国史記』および『好太王碑』による推定

第七・二節に記した倭国との関係事項の数を、『三国史記』と『好太王碑』^{コウタイオウヒ}碑文を合わせて、数えてみる。ただし古い時代の『三国史記』の年代はあてにならない。(一)内は、前記の『日本書紀』にある日本側の朝鮮半島関係の記事数である。

一〇〇年以前	三件
一〇一～一五〇年	二件
一五一～二〇〇年	二件
二〇一～二五〇年	四件
二五一～三〇〇年	六件
三〇一～三五〇年	四件(二件)
三五一～四〇〇年	七件(一四件)
四〇一～四五〇年	一五件(二三件)
四五一～五〇〇年	六件(三件)
五〇一～五五〇年	〇件

五五一〜六〇〇年 〇件
六〇一年以降 三件

〈神功皇后〉の三二〇年の三韓征伐が史実だとすると、これは大和朝廷による朝鮮進出政策の初期段階と思われるので、「2」と「3」を総合して、活躍期間が「三二〇〜八〇年ごろ」との推定に無理は感じられない。

〔4〕宋書にある「倭の五王」の記録による推理

『魏志倭人伝』^{ギンワジンデン}以後、しばらくはシナ王朝の記録に日本の記事は見えないが、五世紀の初めになって、「倭の五王」と呼ばれる記録が『宋書倭国伝』にあらわれる。

宋とは東晋^{トウシン}の武將劉（武帝）が四二〇年に建国した王朝である。

その宋に使者を送ったのは、つぎの五人の王（日本の天皇）であり、おおまかな系図と没年が記されている。

（一）内の数字は、記された没年である。

讃（四三八年）

珍（四四三年）・・・

・・・濟（四六二年）——興（四七八年）

武（不明）

ただし没年は、次の王が、先王が没して新たに即位したとして挨拶の使者を送ってきた年であって、実際の没年はその少し前かもしれない。

（一）のなかの数字はしたがって推定没年であるとともに、次の王が使者を送った年でもある。

最初の讃^{サン}が宋王朝へ使者を派遣したのは、四二一年と四二五年とされている。なお王の名は不明だがその前の王朝・東晋に四一三年に使者がきたことが、『晋書』に記されている。讃の一代前の王かもしれない。

これらの使者が携えた文書では、日本が朝鮮半島のかりの地域で權益を確保していると強調していること、またシナ王朝（晋〜宋）でもその權益確保を認めていたこと——が、宋書の記事から判明する。

具体的には、次のような文言がある。

五王のうち二番目の珍^{チン}が、四三八年に使者を派遣したとき自分のことを、

「使持節都督（軍政の官職） 倭・百濟・新羅

・任那・秦韓（辰韓）・慕韓（馬韓）六国軍事、

安東大將軍、倭国王」

——と述べた。

つまり日本列島の支配権および高句麗を除く朝鮮半島（三韓／百濟・新羅・任那）の支配権が日本の天皇にあることを、シナ王朝の宋に主張したのだ。六国とは三韓とその後継国とを重複させて大げさにした国数である。しかしすでに百濟の王を使持節都督に認めていた宋では、この主張を認めるわけにはゆかず、とりあえず、

「安東將軍・倭国王」

——にした。

そのあと宋は、三番目の濟が四四三年に使者を送ったとき、同様な、

「安東將軍・倭国王」

——を与えたが、これに日本の天皇は不満を持って厳しく要求したらしく、そのあと同じ濟が四五一年にも送ったとき、宋王朝は、

「使持節都督 倭・新羅・任那・加羅・秦韓・

慕韓 六国軍事」

——という称号を加えた。

つまり二番目の珍が要求した六国のうち、すでに称号

を与えていた百濟を除く国々の支配者が日本の天皇であることを認めたのだ。

加羅は任那の前身にあたる国だが、百濟を除いたかわりに、数合わせで付加したものである。

当時のシナ王朝が、隣接する朝鮮半島の情勢を知らなかった筈はないから、この珍や濟の要求に宋が応じたことは、実際に朝鮮半島南部のほとんどを日本が支配下に置いていたことの証明になっている。

なお高句麗は百濟と同様な称号を独自に与えられていた。

また五王の最後の武も、東の五十五国、西の六十六国、海の北（朝鮮半島）の九十五国を平らげた——と述べ、それを認められて濟と同じ称号を得ている。

シナ王朝が日本にゴマをするような必要はまったく無いので、これらのやり取りからいえるのは、四世紀～五世紀にかけての神功～應神～仁徳の朝鮮出兵とその結果として南朝鮮で権益を得た伝承が史実であることが、宋の正史から証明できる——ということである。

さて、この「倭の五王」が、『記紀』のどの天皇にあた

るのかについてであるが、なにしろ名前が一字にされてしまっているので、確定は難しい。

日本の使者によるそのとき使われていた天皇名つまり諱^{イミナ}の読みを、漢字一字で勝手に表現してしまっているのだ。

現在もつとも賛成者が多いのは、つぎの対応である。

四一三年の遣使

↓ 第十五代	應神天皇	または
第十六代	仁徳天皇	
↓ 第十六代	仁徳天皇	または
第十七代	履中天皇	
↓ 第十八代	反正天皇	
↓ 第十九代	允恭天皇	
↓ 第二十代	安康天皇	
↓ 第二十一代	雄略天皇	

このうち後の三天皇についてはかなり確実だとされているし、珍についても異論は少ない。

問題は第一の讃で、仁徳天皇説と履中天皇説とがあつて結論は出ていない。ただ履中天皇は在位期間が短かつたらしいので、仁徳天皇説の方が有力である。

仁徳天皇の諱^{イミナ}は国風諡号と同じ大鷦鷯^{オオサザキ}（大きなミソサザイ）なので、日本の使者は「サザキ・・・」と発音したであろう。シナの役人はその発音の「サ」を讃^{サン}の一時で表現したのだろう——というわけである。

他の一字名についても、似たような対応が考えられている。

四一三年の遣使については、史書に名が出ていないので、在位年代から推定するほかはないが、やはり仁徳天皇の可能性がたかい。

この対応を元に、各天皇の干支による崩年と、シナ正史による崩年とを比較してみると、次のようになる。上が干支、下がシナ正史の数字である。

第十六代	仁徳天皇	四二七年／四三八年
第十七代	履中天皇	四三二年／四三八年
第十八代	反正天皇	四三八年／四四三年
第十九代	允恭天皇	四五四年／四六二年
第二十代	安康天皇	？／四七八年
第二十一代	雄略天皇	四八九年／？年

日本とシナの両正史できわめて近い数字になっている

ことがわかる。せいぜい十年しか違わない。しかも宋書の数字は次の天皇の使者が来た年だから、実際の崩年はこれより数年は減ずる可能性があり、だとすると一致度はもつと高い。

千六百年も前のまったく無関係な二つの資料がこれだけ一致するのは興味ぶかいが、このことから、崩年干支推定の「1」を活かすことができると考えられる。

すなわち〈神功皇后〉の活躍期間は「三六〇〜八〇年ごろ」と推定できる。

〔5〕^{シチシトウ}「七支刀」の銘文による推定

第七・十一節に記したように、この刀ができたのは三六九年、日本に朝献されたのが三七二年と推定されている。

すなわち任那における権益を確立して日本府をつくった年とその直後である。

『日本書紀』によれば崩年の十七年前のできごとなので、〈神功皇后〉の活躍期間は「〜三八〇年ごろ」と推定できる。

〔6〕御陵の考古学的研究による推定

天皇陵は発掘がなされないため、厳密な調査は困難とされているが、おおまかに造営年代を推定することはできる。

ここでは、国立歴史民族博物館教授の白石太一郎作成の表から判読してみる。

ただしどれがどの天皇の御陵なのか、については異説もあるので、参考にとどめなければならぬ。

たとえば仲哀天皇陵とされている御陵は実際は第二十一代雄略天皇のものではないか——という説があるし、十五代と十七代についても、入れ違っているのではないか——との考えもある。

また推定年代も「年輪年代法」などによって今後古い方向に修正される可能性がたかい。

第十三代成務天皇陵	三八〇年前後
第十四代仲哀天皇陵	四九〇年前後
〈神功皇后〉陵	三五〇年前後
第十五代應神天皇陵	四三〇年前後
第十六代仁徳天皇陵	四四〇年前後
第十七代履中天皇陵	四一〇年前後

〈神功皇后〉の摂政在位が三〇年間とすると、活躍期間は「三二〇〜五〇年ごろ」と推定できる。

◎「卑彌呼」Ⅱ「神功皇后」説の可能性

これらのさまざまな方角からの推定をまとめると、〈神功皇后〉とその前後の天皇が活躍された実紀年は、

仲哀天皇 西暦三〇〇年代半ば

神功皇后 西暦三〇〇年代半ばから後半

應神天皇 西暦三〇〇年代後半から四〇〇年前後

仁徳天皇 西暦四〇〇年前後から四〇〇年代前半

——といったことになるだろう。

〈神功皇后〉の活躍のなかでも白眉とされる三韓征伐は、『日本書紀』の記述どおりとすれば、仲哀天皇崩御の直後だから、実紀年は三六〇年ごろということになる。

またのちの進出を神話化したのみだとすれば、晩年の三七〇年ごろの任那ミマナニホン日本府成立の事件と、次の代の四〇

〇年前後の『好太王碑』コウタイオウヒにある事変とを主な材料にして
いる——ということになるが、南原次男が主張するように、その前哨戦と考える方が当たっているであろう。

したがって、どう幅広く解釈してみても、〈神功皇后〉ジンクウコウゴウの活躍した時代は、西暦二〇〇年代の〈卑彌呼〉ヒミコの時代とは合わない。

百年も違っている。

というわけで、多くの照応点があるにもかかわらず、

「卑彌呼」Ⅱ「神功皇后」説

——が成立する可能性はほとんど無い。

また、

「邪馬台国」ヤマトイコク九州説

——への援用も、神武東征ジンムトウセイと似た話があるので誘惑にはかられるが、考古学的にはかなり苦しいといえる。

ただ、〈卑彌呼〉についての古い記憶が、〈天照大神〉アマテラスオオミカミの神話のほかに〈神功皇后〉の物語にもいくぶんか投影した可能性はあるだろう。

また、神功皇后紀にある『魏志倭人伝』キシワジンデンの引用も、きわめて古い時代のものなので、史料として貴重である。そういう意味で、〈卑彌呼〉を語るとき、〈神功皇后〉

の検討は欠かせないのである。

＊

奈良時代から長く信じられてきた「〈卑彌呼〉Ⅱ 〈神功皇后〉説」^{モトオリノリナガ}にはじめて異を唱えたのは、江戸時代の国学者・本居宣長とされている。宣長の学問的態度の立派さがわかる。

＊

もちろん、〈神功皇后〉を〈卑彌呼〉に比定し、「邪馬台国」九州説」を展開するSF的な創作なら、ロマンにあふれていて魅力的であり、今後も書かれ続けることを期待している。